

落合遺跡 発掘調査報告書

1996

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

おち　あい

落合遺跡

発掘調査報告書

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、落合遺跡の調査成果をまとめたものです。

落合遺跡は山形盆地北部に位置する村山市にあります。村山市は古くから交通の要衝として発展し、北村山地方における中心的な都市のひとつです。落合遺跡は村山市街北部の高玉地区、JR奥羽本線袖崎駅から北々西へ約1km、北流する最上川と沢の目川の形成した舌状に張り出した河岸段丘上に営まれています。

この度ふるさと農道緊急整備事業（拝見地区）に伴い、工事に先立って落合遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代の住居跡・貯蔵穴などの遺構が見つかり、縄文土器・土偶・石器・須恵器などの遺物が出土し、縄文時代から古代という長期間にわたり断続的に利用された遺跡であることがわかりました。特に、遺跡範囲の中央部を縦断して調査したため、遺跡範囲内の遺構の分布状況が分かり、その結果、貯蔵域、住居域などと決められた村作りの様子、つまり縄文時代の集落構成の一端がうかがえます。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へ伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書はふるさと農道緊急整備事業（押見地区）に係る「落合遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は山形県教育委員会の委託により、山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名	落合遺跡（CMYOA）	遺跡番号 642
所　在　地	山形県村山市大字土生田字落合2595他	
調査期間	発掘調査 平成7年4月1日～平成8年3月31日	
	現地調査 平成7年10月2日～平成7年11月22日	
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
発掘調査・資料整理担当者		
調査第一課長	佐々木 洋治	
主任調査研究員	野 尻 健	
調査研究員	山 口 博 之	
嘱 托 職 員	渡 辺 薫	
- 4 発掘調査及び本書を作成するに当たり、北村山地方事務所耕地課、袖崎土地改良区、村山市農林課、村山市教育委員会、など関係諸機関並びに、村山市の方々から協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、山口博之、渡辺薫が担当した。編集は尾形興典が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。
現地調査における航空写真撮影及び遺物実測の一部については、株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T……住居跡 S K……土坑 S X……土坑・性格不明遺構

S P……ピット S ……躓 R P……完形・一括土器・土偶

R Q……石器

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は、N-26°20'—Eを測る。

(3) 遺構実測図は1/20、1/40、1/60、1/80、1/200の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。

(4) 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土はFを付けて区別した。

(5) 遺構観察表中の（ ）内の数値は検出部分の計測値を示している。

(6) 遺物実測図・拓影図は1/2、1/3、1/4、で採録し、各々スケールを付した。

遺物図版については任意としたが、重要なものについてはスケールを付している。

また、一覧表で各々の法量を採録してあるので参照されたい。

(7) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表とも共通のものとした。

(8) 遺物観察表中の（ ）内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。

(9) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の概要	4
IV 遺跡の層序	4
V 検出遺構	
1 遺構の分布	6
2 積穴住居跡	6・12～13
3 土坑	13・17
VI 出土遺物	
1 土器	21
2 土偶	21～22
3 土製品	22
4 石製品	22
5 石器	22
VII まとめ	33
報告書抄録	34

表

表 1 遺構観察表	20
表 2 遺物観察表	32

挿 図

第 1 図 遺跡位置図	2
第 2 図 遺跡出土土器 (『村山市史 別巻一 原始・古代編』)	3
第 3 図 土層柱状図	4
第 4 図 調査区概要図	5
第 5 図 A～E 区遺構配置図	7
第 6 図 A・B 区遺構平面図	9
第 7 図 C 区遺構平面図	10
第 8 図 D 区遺構平面図	11
第 9 図 D・E 区遺構平面図	12
第10図 S T 1・2住居跡	14

第11図	S T 3・4 住居跡	15
第12図	S T 5・6 住居跡	16
第13図	S X 6・9・10・17土坑	18
第14図	土坑・ピット	19
第15図	出土土器(1)	23
第16図	出土土器(2)	24
第17図	出土土器(3)	25
第18図	出土土器(4)	26
第19図	出土土器(5)	27
第20図	出土土器・土偶・土製品・石製品	28
第21図	出土石器(1)	29
第22図	出土石器(2)	30
第23図	出土石器(3)	31

図 版

- 図版1 航空写真（遺跡上空北東より撮影）
 図版2 航空写真（遺跡上空南より撮影）
 図版3 A区調査状況 D区調査状況
 図版4 A・B・E～H区調査状況
 図版5 S T 1・2・3・5・6 住居跡
 図版6 S T 4 住居跡
 図版7 S X 6・9・2・17・23・24 土坑・S K107・96 土坑
 図版8 R P10 (SK113) 出土状況・R P11 (SK114) 出土状況・S K115 土坑・
 S K45 土坑・R P3 (SP30) 出土状況・R P12 (SK123) 出土状況
 図版9 出土土器 (15-1・2、16-1・2) 遺構内出土土器
 図版10 出土土器
 図版11 出土土器 遺構内出土土器
 図版12 遺構内出土土器・土製品
 図版13 出土土器 (20-1・2)・土偶・土製品・出土石器
 図版14 磨石・凹石・石皿 (23-5)・石棒 (23-6・7・8)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

落合遺跡は県遺跡番号642として登録された、地元の方々には古くから知られている遺跡である。遺跡の範囲も東西300m、南北600mの約150,500m²にもおよぶ大規模な広がりをもつ集落跡と推定されている。

近年当地に道路整備計画が進められており、今回の調査はふるさと農道緊急整備事業(押見地区)を原因としたものである。この事業は平成9年度に全線舗装完成し終了する。

調査に先立って、平成6年の秋に山形県教育文化財課により詳細分布調査(試掘)が行われ、多量に発見された遺物から繩文時代中期の遺跡であることが分かった。この結果を基にして、平成7年1月～4月に事業主体の北村山地方事務所耕地課や山形県教育文化財課、山形県埋蔵文化財センターとの間で遺跡の取り扱いについて協議を行い、現状保存の可能性や施工方法等の検討を含めた調整が重ねられた。また協議が進む中で、調査事務所の設置場所および掘削土の仮置きする場所を借地によって対応せざるを得ないことが判明した。そこで発掘区に隣接する私有地を借地することになり、地権者との借地契約を平成7年8月21日に袖崎地区公民館で行った。

以上のような経過を経て、緊急発掘調査を平成7年10月2日から11月22日まで実施した。

2 調査方法と経過

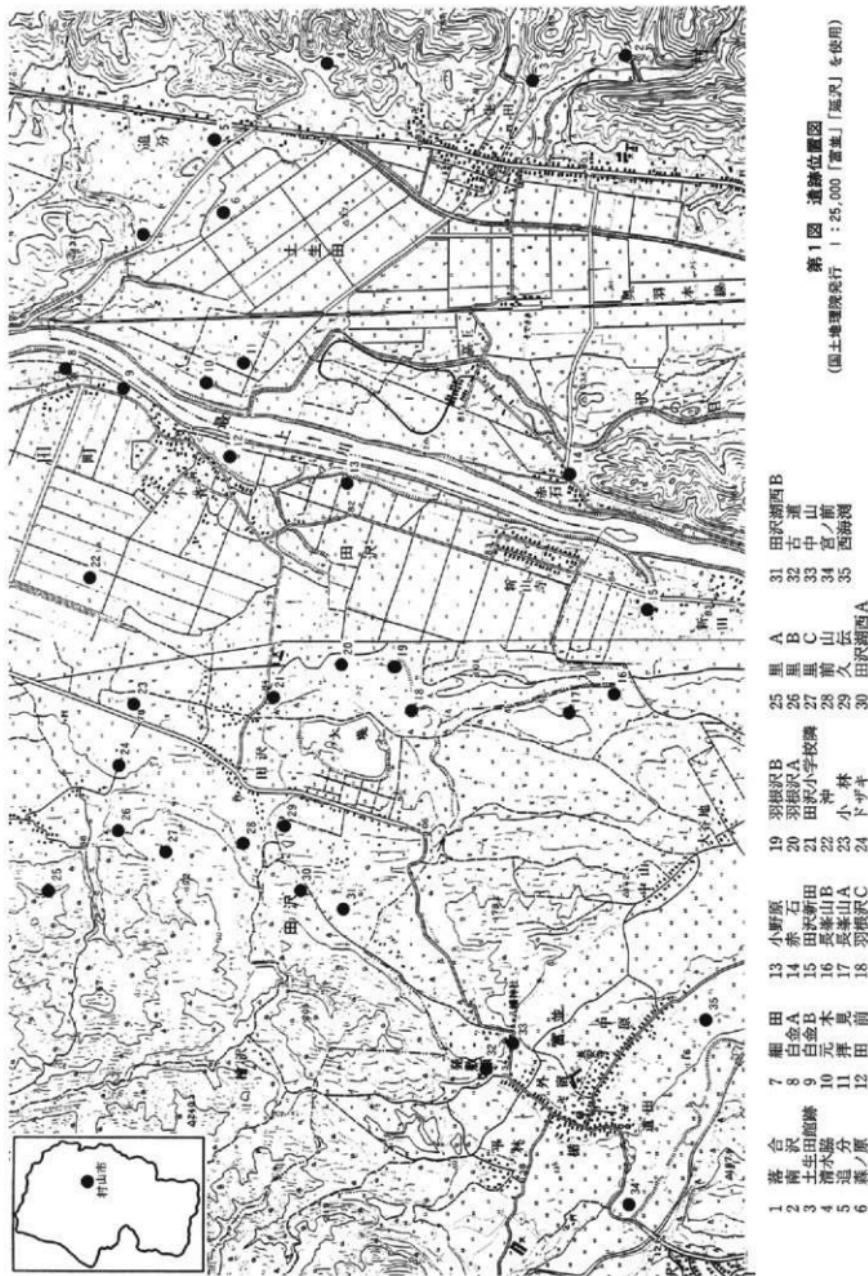
今回の発掘調査は遺跡範囲の中央部の道路拡幅部分に係る382m²(第4図)を調査対象として実施したものである。

発掘調査は調査区が南北に細長いため、記録などの便宜上、地点毎にA～H区に区分し、調査区域を設定した。次に、A～C区、E～H区についてはスコップ等を用いて地山直上まで表土を除去した。D区は側溝の排土が多量であり、人手、日程の面で効率化を図ることを考えたため重機による表土除去を行った。調査区内には農道に設置した任意の杭を基準に、5m×5mを一単位とするグリッドを設置した。その後、面整理作業を行い、堅穴住居や土坑等の遺構や遺物を検出した。

調査は借地にかかる部分の翌年の耕作の準備の都合から、A→B→C→D→E→F→G→H(第4図)の順序に進め、調査の終了した区から順次埋め戻しを実施した。

遺構は覆土を半蔵又はベルト状に残して、手掘りにより掘り下げ、平面・断面図等を作成し、遺構や遺物の写真撮影や空中写真等の記録作業を行った。なお出土した遺物は、遺構内出土のものは各遺構番号ごとに、一括のものや復元可能なものは遺物番号をつけて、包含層出土のものは便宜上、農道東側のA～D区についてはグリッド番号-A、農道西側のE～H区についてはグリッド番号-Bとして取り上げた。

発掘調査終了近くの11月15日に調査の成果を地元の方々や関係者等に知りたいための調査説明会を遺跡現地で行い、多くの参加者を得た。現地の発掘調査は11月22日に終了し、同時に機材撤収を行った。その後、平成8年3月まで整理作業を行った。



II 遺跡の立地と環境

落合遺跡は村山市大字土生田字落合2595他に所在し、JR奥羽本線袖崎駅から北々西約1kmの高玉地区に位置している。西に葉山連峰、東に飯岳を望む。本飯田東方の山地から西流する沢の目川は、落合・拝見地区で最上川に注ぎ込む。落合遺跡は沢の目川の左岸、最上川右岸直上の段丘面を主として占地し、標高は約75mを測る。

村山市内では縄文時代の遺跡が現在までに100ヵ所近く確認されているが、その中でも、落合遺跡と同じ、縄文時代中期の遺跡は40数ヵ所と多い。落合遺跡は昭和50年に遺跡の一部が開田のため破壊され、昭和52年度から袖崎地区に県営圃場整備事業が計画された際に、多量の土器群が採集された。それらの良好な資料は『村山市史 別巻一 原始・古代編』に掲載（第2図）され、山形県内の縄文時代中期の代表的な遺跡として紹介されている。

村山市内には山形県を代表する、縄文時代の集落遺跡が幾つか所在している（第1図）。これらのうち、圃場整備の進行に伴って「西海渕遺跡」や「川口遺跡」、「宮の前遺跡」が県教育庁文化課と県埋蔵文化財センターの手により調査が行われている。西海渕遺跡では縄文時代中期の集落の構造が分かり、川口遺跡では県内でも類例が少ない、縄文時代後期中葉の土器群が出土した。さらに宮の前遺跡では製塩土器など、縄文時代晩期の活発な交易が窺える好資料が得られている。落合遺跡と同じ沢の目川流域では、縄文時代前期の赤石遺跡が昭和52年に県文化課によって調査されている。



第2図 落合遺跡出土土器「村山市史 別巻一 原始・古代編」(村山市1982)より

III 調査の概要

今回の調査は落合遺跡の範囲約150,500m²のうち 382m²について実施した。(第3図) 調査区域は赤石から拝見に至る農道の拡幅部分であり、農道は遺跡の中央を南北に縦断している。調査区は最終的に農道東側にA～D区、農道西側にE～H区設定し、そのうちF～H区については遺構の確認のみを行ったものである。調査区は地境杭や農道を境にして分け、調査した順にA～H区と付けた。農道の拡幅部分に沿って電柱が設置しており、その電柱設置によって遺構の一部が搅乱を受けていた。

調査はまず、借地幅の明示を行い、その後A区から表土除去を行った。地権者の話によるとA～B区については「サクランボ」の植え付けなどにより、近年重機を一部分入れたということであり、搅乱及び天地返しなどを受けたためか、遺構検出及び遺構プラン確認が非常に困難であった。A～B区にSX(性格不明遺構)として登録したものが多いのはそのためである。しかしSXを掘り下げるに土坑として機能したと考えられるものが多くあった。また調査の都合上、A～B区については、調査区中央の60cm幅を、作業通路の確保と作業の安全のためのベルトとして残したため、土坑全体の掘り込みを確認できていない。A～E区については遺構検出、マーキング、遺構平面図・断面図作成、遺構完掘、レベルリング、また随時写真撮影を行ったのちに、各区の調査が終了した時点で埋め戻しを行った。F～H区については遺構確認をした後、埋め戻している。

IV 遺跡の層序

落合遺跡は最上川右岸、沢の目川左岸の河岸段丘上に立地する。現在の地目はA～D区は果樹・畑地であるが、E区のみ水田である。A～D区については場所によって層位の違いは若干見られるものの、基本層序は3層に大別できる(第3図)。I層は黒褐色シルトで、場所により粘性を帯びる。A～D区にわたる層で耕作土である。II層は包含層である。A～C区では包含層から多くの遺物が出土した。またD区は耕作によりこの包含層はほとんど確認されない。III層は一部消えたりしながら薄い層となって所々に確認される。地山は明黄褐色・黄褐色粗砂及びその下層の明黄褐色粘土であり、この層を掘り込んで遺構が構築される。

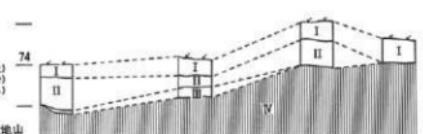
E区は、現水田面の層の下に間層を挟み旧水田面と思われる層が確認された。この間層からは遺物が多く出土したが、包含層ではなく開田や圃場に関わる盛土と考えられる。

遺構確認面はさらに下層であり、地
山面を除いては色調、土質とともに他の
調査区の層や層序と異なっていると
思われる。

A～D区基本層
I 10Y R 2/2黒褐色シルト(1～5mmの大粒が少々混じる、木の折による隙隙あり、耕作土)
II 10Y R 2/2黒褐色シルト(1よりやや暗い色調、1～2mmの大粒混じり、上部が少々含む)
III 10Y R 2/2黒褐色シルト(IIよりやや明るい色調、10Y R 4/4褐色粗砂が斑状に混じる)
IV 10Y R 5/6褐色粗砂(地山)

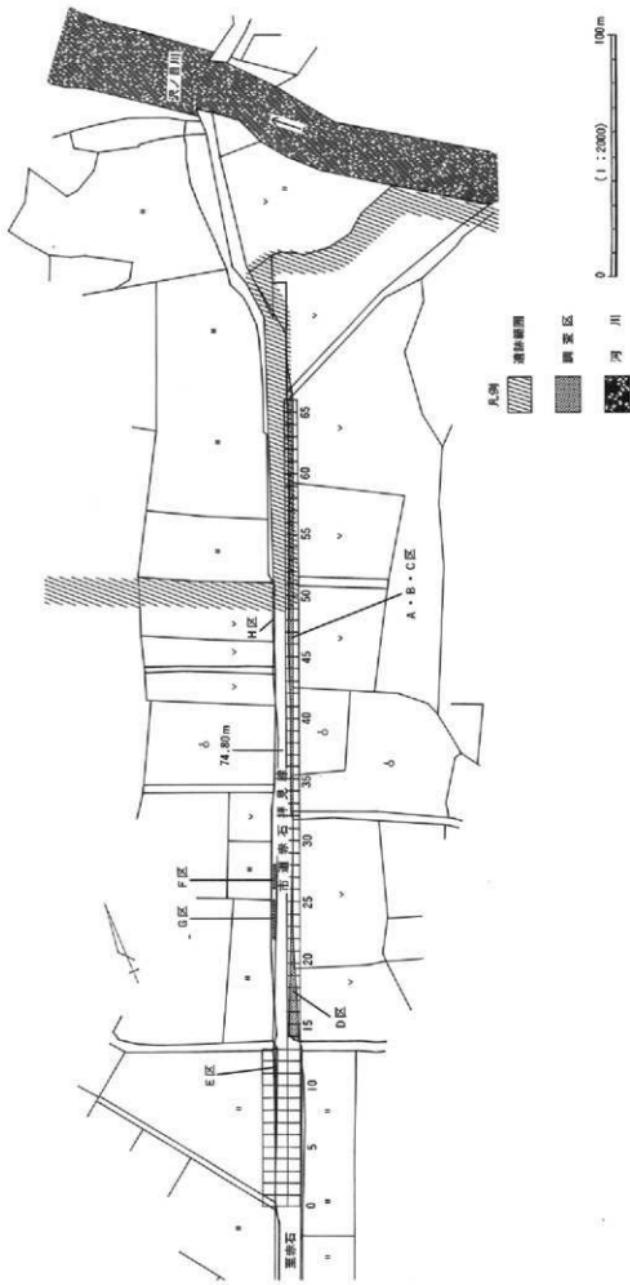
0 (1 : 3000) 100m

凡例



第3図 土層柱状図

第4図 調査区概要図



V 検出遺構

1 遺構の分布

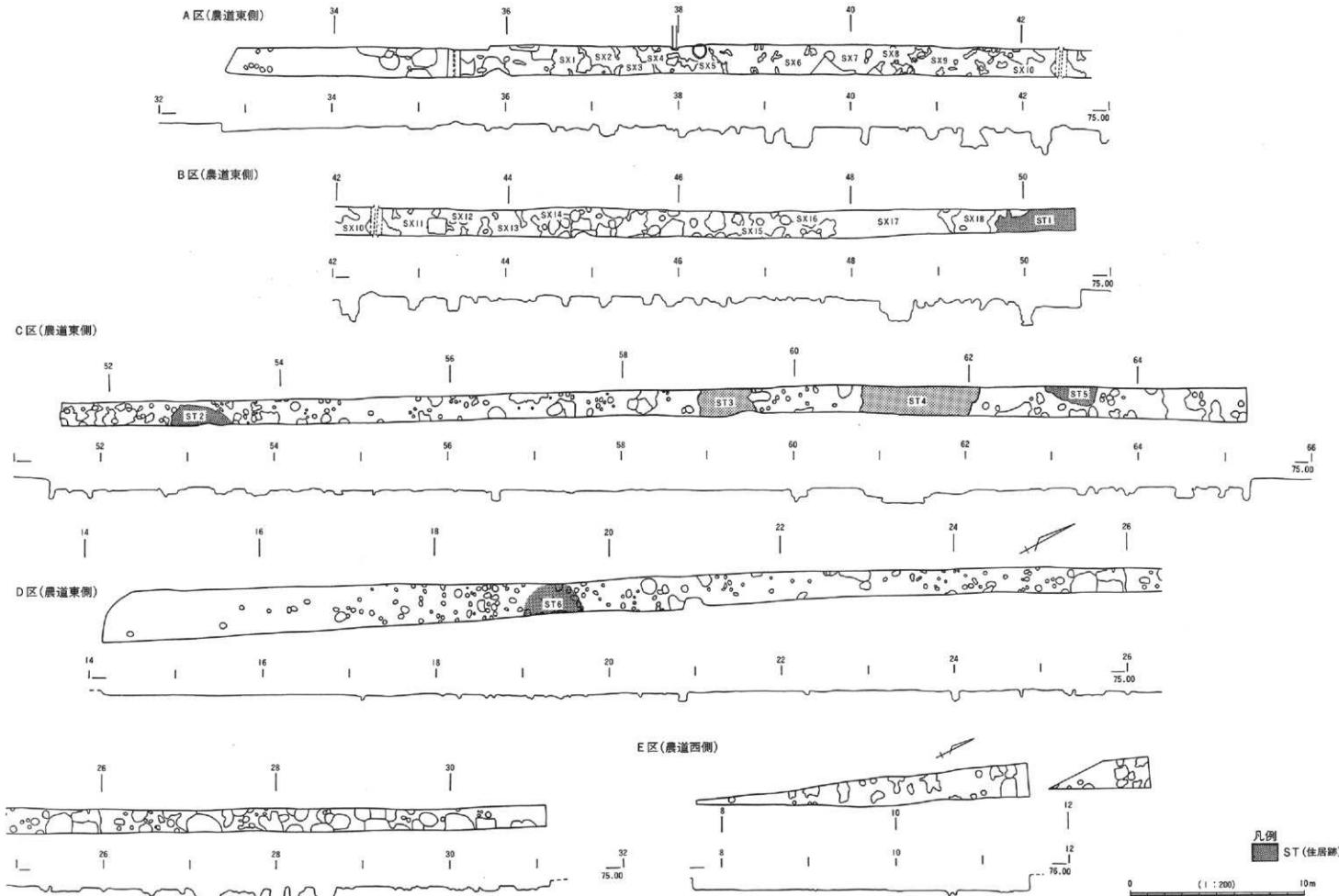
今調査では調査区全体にわたって遺構が密集して検出された。D～C区（15～66-Aグリッド）にかけては、南から北に向かってゆるやかに傾斜して約50cm低くなり、調査区地表面が標高約73.50mを測る。またE区は地表面が一段と高く、約74.60mである。以下A～D区を中心に遺構の分布を述べる。確認された遺構は竪穴住居跡が6棟、土坑が142基、柱穴・ピットが約310基を数える。住居跡はB区北端からC区にかけて5棟、D区に1棟検出された。D区の住居跡は床面が耕作により確認されず、柱穴のみの検出である。調査区の幅が1.5～2m前後であるため部分検出であり、プランは円形と推定される。規模は、重複しているものも含めて直径約3～6m位である。残りがよいものでは遺構確認面から床面まで約60cm程の掘り込みが認められる。しかし調査区の幅が限定されたためか、いずれの住居跡からも炉跡は確認されていない。土坑は全調査区に分布するが特に、断面が袋状を呈する深くて大型の土坑はA区北半からB区（38～50-Aグリッド）にかけて分布する。またやや小型の袋状の土坑もA～Dの各調査区に確認される。住居跡、土坑に混じって柱穴・ピットも散在しており、D区南半（16～20-Aグリッド）にやや多い。また、遺構密度が希薄な地域としては、A区南半（35～33-Aグリッド）とD区南端（16～15-Aグリッド）が上げられる。以上のような分布状況から見ると、住居跡が集中する区域、土坑が集中する区域、ピットが集中する区域というように、同種類の遺構がある程度まとまって分布している状況を見ることができる。

2 竪穴住居跡（第10～12図）

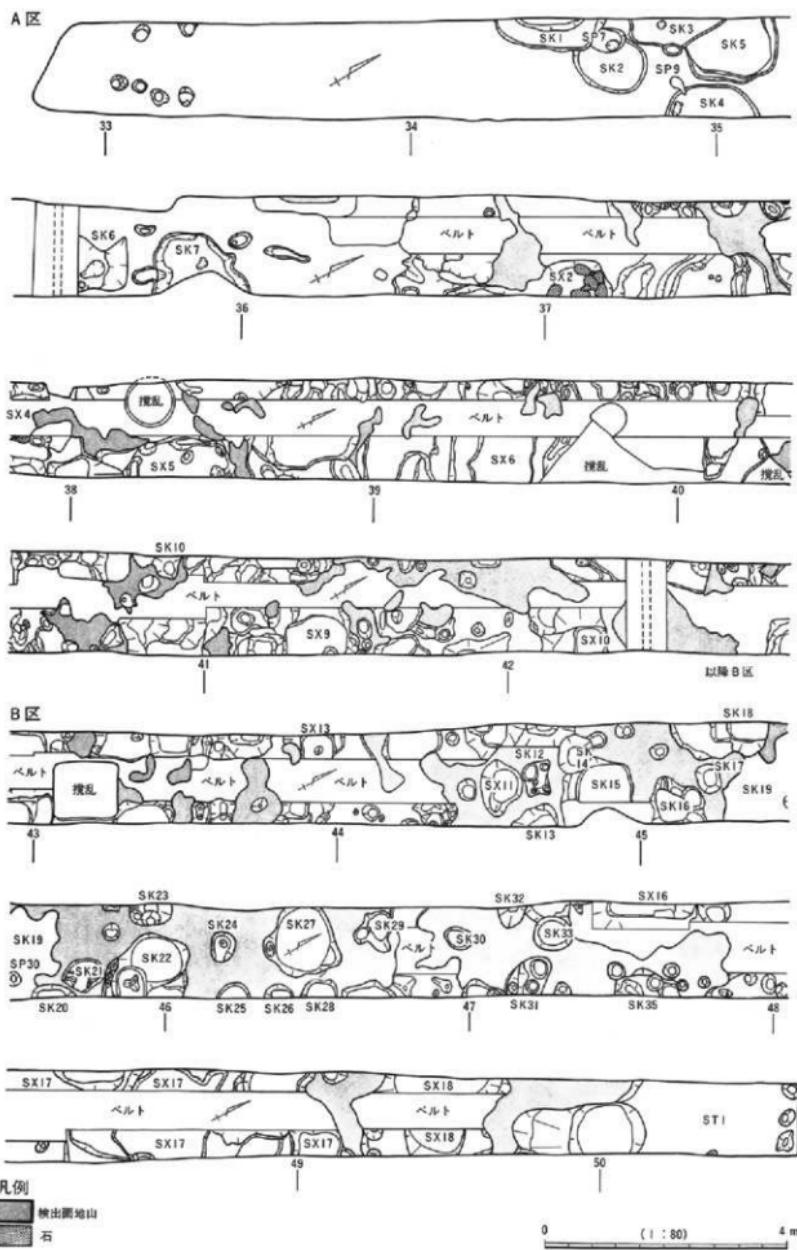
確認された住居跡はS T 1～6の6棟である。調査区幅が狭いため、すべて部分検出の住居跡である。また炉跡は確認されなかった。以下個々について概略を述べる。

S T 1（10図、図版5・9）：B区北端、50～51-Aグリッドに所在する。北端は調査区外となるが、規模は南北4.66m、東西1.21mを測る。遺構確認面から床面までの深さは約60cmである。当初性格不明遺構として捉えたが、掘り下げたところ、堅くしまり平坦な床面と考えられる面が検出されたため住居跡と推定した。住居跡南端に袋状土坑が存在し、この土坑は住居跡に切られる。土坑の覆土は1～4層である。住居跡の覆土は5～8層までの4層からなり、黒褐色シルトを基本とする。床面は礫が混じり堅く、ほぼ平坦である。遺物は深鉢、浅鉢の土器片が出土している。時期は大木8a式期と思われる。

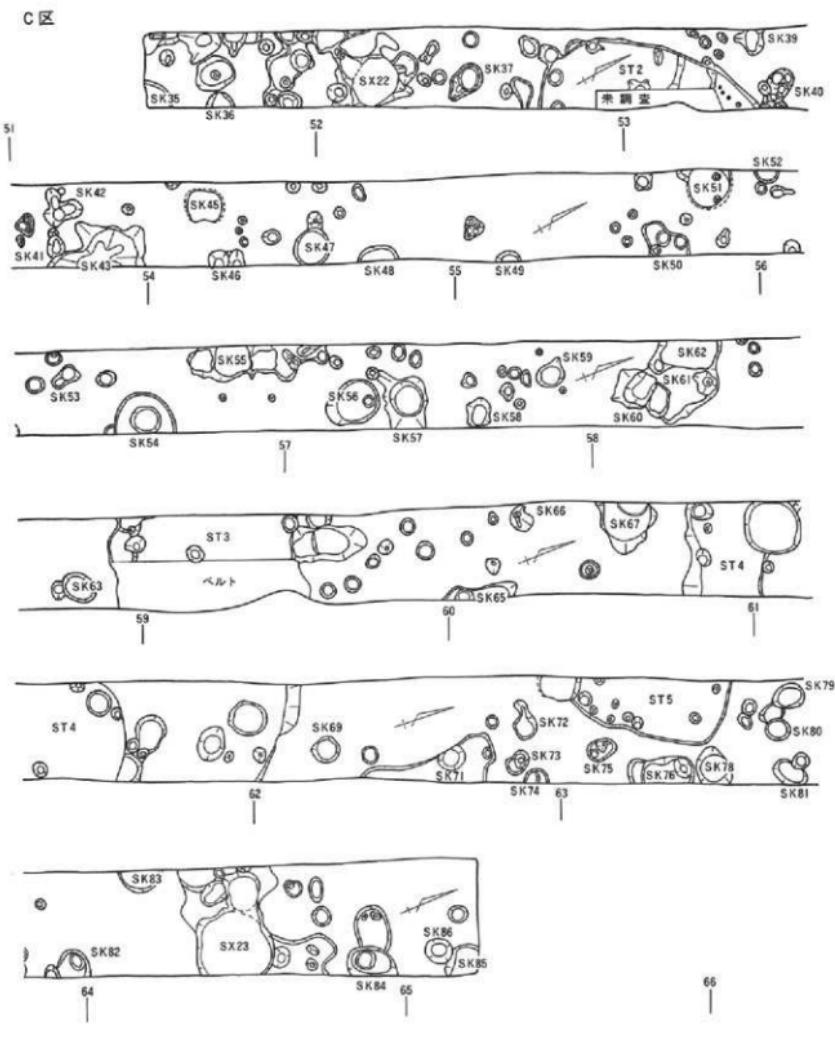
S T 2（10図、図版5・9）：C区、53～54-Aグリッドに所在する。プランは半円形を呈し、東側は調査区外となる。電柱設置により東部分は搅乱を受ける。またSK40に北端を切られている。規模は南北3.72m、東西1.16mを測り、確認面から床面までの深さ40cmである。柱穴は南側壁際に3個認められる。柱穴は径22～24cmの円形を呈する。また床面からの深さは20～40cmである。覆土は2層からなり、床面はほぼ平坦である。遺物は土器体部片が少量出土したのみである。時期は大木8a式期のものと思われる。



第5図 遺構配置図

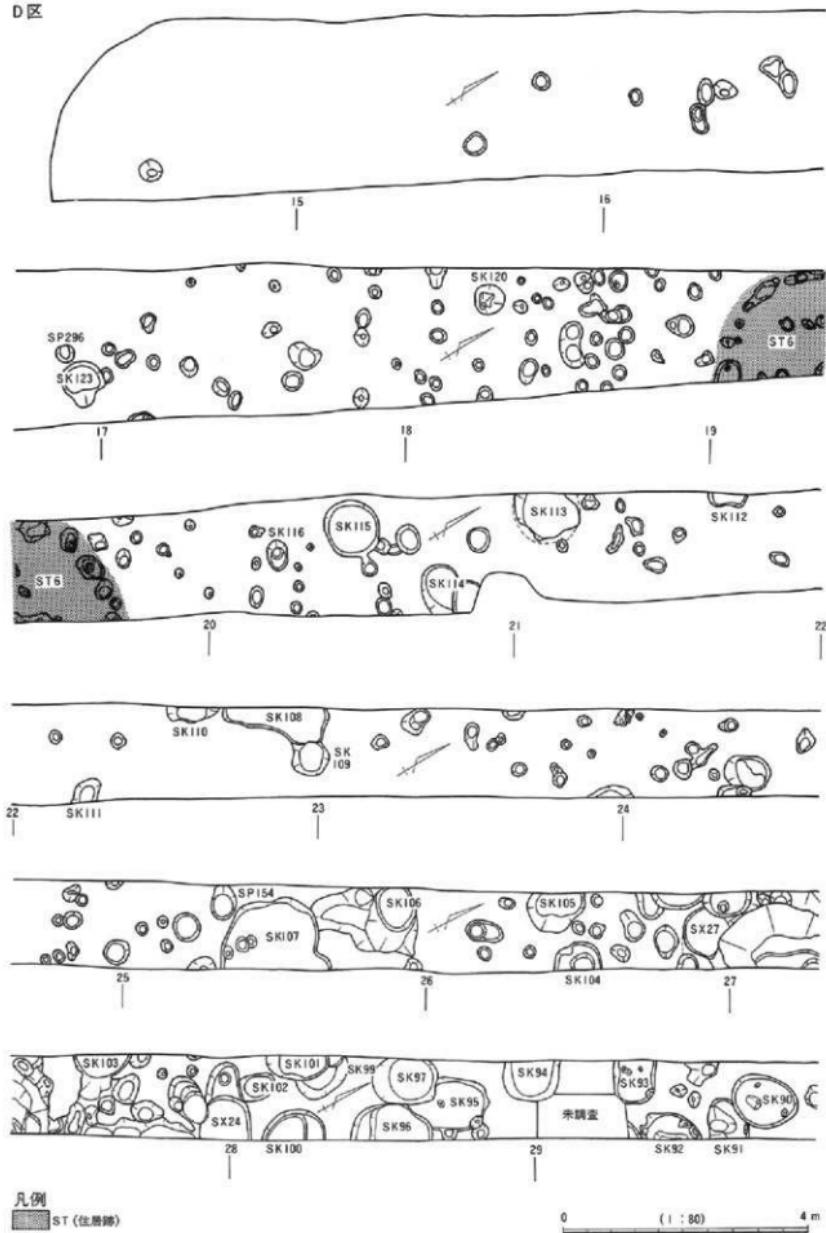


第6図 A・B区造構平面図

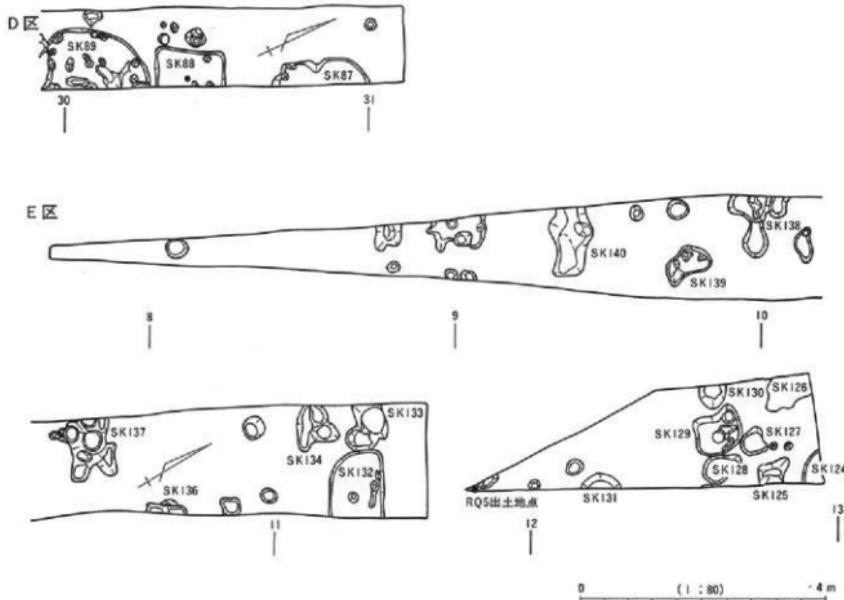


第7図 C区造構平面図

D区



第8図 D区造構平面図



第9図 D・E区遺構平面図

S T 3 (11図、図版5・9) : C区、59~60-Aグリッドに所在する。東西とも調査区外となり、検出部分の東半分は未調査である。また北端の一部が搅乱を受ける。規模は南北3.10m、東西1.50mである。確認面から床面までの深さは59cmを測る。柱穴は壁際とベルトとの境の中央付近に全部で3個認められる。26~33cmの円形で深さは22~24cmを測る。覆土は5層からなり、レンズ状の堆積を示す。床面は北に向かって傾斜し、若干低くなる。遺物は浅鉢や深鉢の口縁部・体部片が出土している。全体の形状が知り得るものはない。土器のほか、円盤状土製品・石製品(20-10・17)や、磨製石斧(22-3)、凹石(23-2)が出土した。時期は大木8a式期のものと思われる。

S T 4 (11図、図版6・9) : C区、61~62-Aグリッドに所在する。東西とも調査区外になり全体は不明である。規模は南北6.82m、東西1.64mを測る。遺構確認面から床面までの深さは78cmである。検出面での切り合い関係は確認できなかったが、調査を進め、断面等を検討した結果、3棟の住居が切り合っているものと推定された。以下、層位及び覆土を基に新旧関係について説明する。土層断面図中の2層として捉えている層が一番新しい住居の覆土と思われる。床面は確認面から28cmを測り、標高は73.02cmである。この床面から9cm浮いた状態でR P 9 (15-1)が出土している。またこの面に土坑はあるものの、柱穴と思われる遺構は確認できない。壁の立ち上がりは緩やかである。次の3層と4層が前述の住居跡より一段階古い住居跡の覆土と推定される。3層は2層より暗い色調で粘土がブロックで混じる。また4層は黒褐色粗砂に黄褐色粗砂が斑状に混じる層で、ごく一部

分にしか見られない。貼床の痕跡を示す層だろうか。この住居の床面は標高72.86mである。柱穴は壁際に2個確認され、径23~36cm、床面からの深さ17~34cmを測る。5・7~9層は一番古い住居跡の覆土と思われる。床面の標高は約72.47mである。断面は底が少し横に広がる袋状を呈し、壁の立ち上がりはやや急である。床面は中央が低く、若干起伏がある。

S T 4 からは多量の遺物が出土したが、遺構検出時に切り合い関係を把握できなかつたためそれぞれの住居ごとの出土遺物としては捉えることができない。遺構確認面からはR P 5 (15-2) がつぶれて広がった状態で一括出土している。また、土偶(20-8)、石槍(21-3)、磨石(22-8)、石棒(23-8)など多様な遺物の出土がみられた。施文や胎土の状態がほかの出土遺物とは異質な深鉢(20-2)も覆土内から出土した。20-2は円筒上層式との関連も考えられる。時期的には大木7 b~8 a式期のものが確認される。

S T 5 (12図、図版5・9):C区南端寄り、64-Aグリッドに所在する。プランは半円形を呈し、西側は調査区外となる。また、南端の土坑を切っている。規模は南北3.06m、東西1.07mである。遺構確認面からの深さは64cmを測る。覆土は3層に分かれれる。床面は1~2cm大の礫が混じる黄褐色粗砂で、堅い。柱穴は壁周辺に確認され、大きさは径18~23cm、床面からの深さ18~37cmを測る。5層は住居跡を切るピットの覆土と考えられる。床面はほぼ平坦である。覆土から浅鉢や深鉢の口縁部・体部片、円盤状土製品(20-11)が出土した。時期は大木8 a式期のものと思われる。

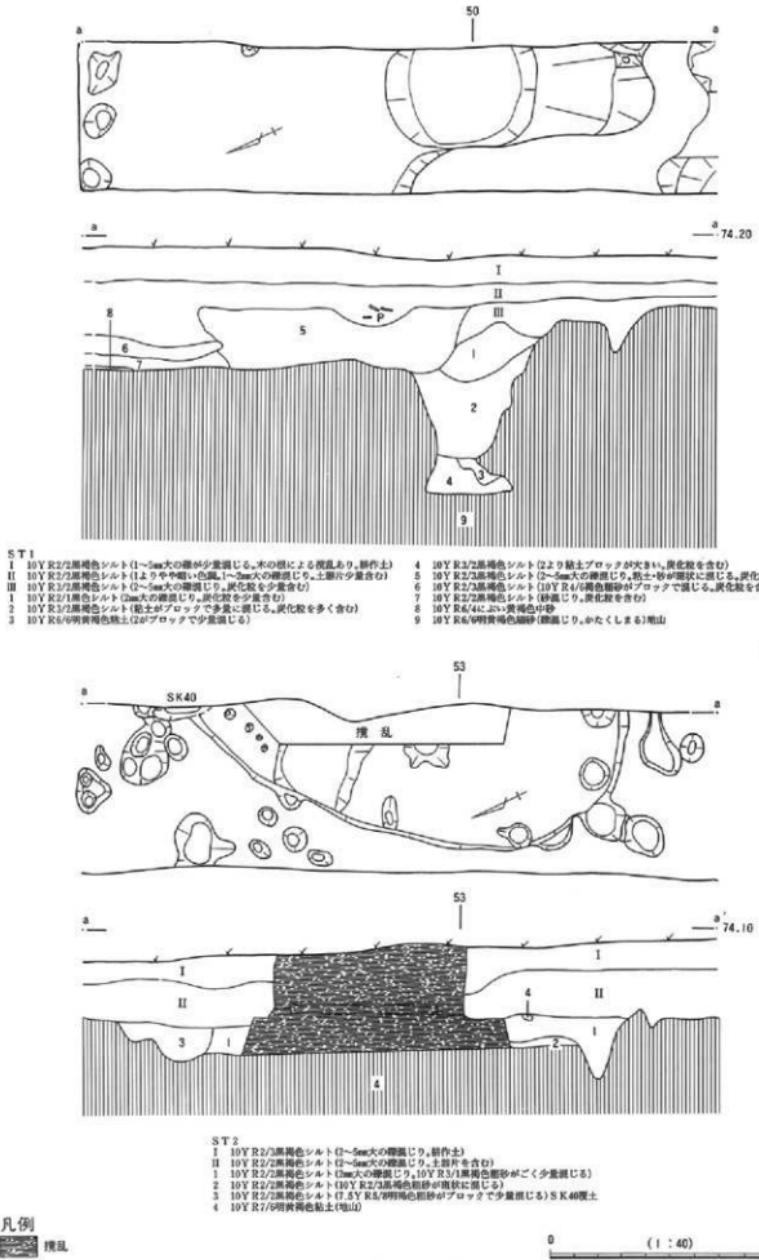
S T 6 (12図、図版5):D区中央部、20-Aグリッドに所在する。耕作による上部削平で柱穴のみの検出である。床面は残存していないものと思われ、柱穴の構成により住居跡とした。半円形を呈し、規模は南北3.44m、東西1.70mである。柱穴は半円状に廻り、一部溝状につながる部分もある。深さは20cm前後から深いものは55cmを測り、あまり一定していない。東側は掘り方がやや深く、西側にいくと浅くなる。覆土はほとんどが黒褐色シルトの単層である。柱穴覆土からの遺物の出土はみられなかった。

3 土坑 (13・14図、図版7~9・11~13)

今調査で土坑として登録された遺構は142基を数える。特徴的な土坑としては断面が袋状を呈する、大型の土坑があげられる。前述したが、A区北半からB区(38~50-Aグリッド)は搅乱を受けていたため、以下のS X 6・9・10・17については遺構のプラン、規模等について確認できなかつた。その他、主な遺構について概略を述べる。

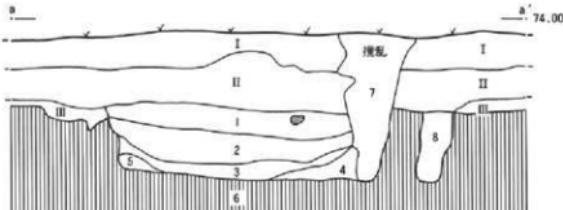
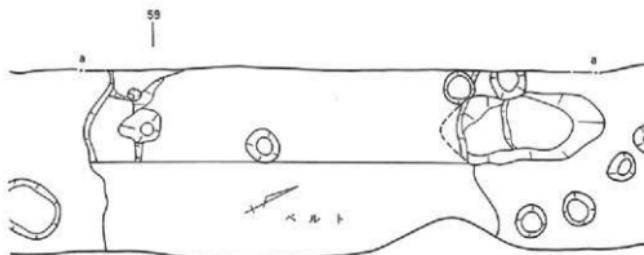
S X 6 (13図):A区、40-Aグリッドに所在する。南北1.60m、遺構確認面からの深さ1.12mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は若干起伏がある。覆土は9層からなっており、レンズ状に互層になった堆積状況を示す。遺物はほとんど出土していない。

S X 9 (13図):A区、42-Aグリッドに所在する。確認面からの深さ1.35mを測る。断面は上面がすばまり、底になると広がる典型的なフラスコ状を示す土坑である。底面はほぼ平坦であり、中央にピットが確認された。覆土は7層からなる。4層に炭化粒が多量に含まれている。出土土器は、深鉢の口縁部、体部片などである。



第10図 ST1・2住居跡

ST3

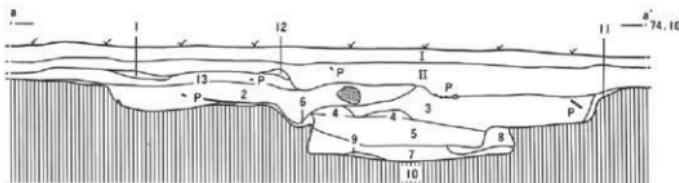
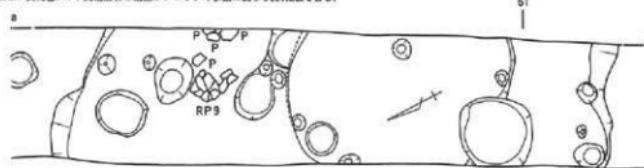


ST3

- I 10Y R2/3黒褐色シルト(2~5mmの細面じり。耕作土)
 II 10Y R2/2黒褐色シルト(2~5mmの細面じり。土壌層を含む)
 III 10Y R2/2黒褐色シルト(よりやや明るい色調。10Y R4/4褐色細砂が斑状に混じる)
 1 10Y R2/2黒褐色シルト(2mmの大粒がより多く混じる。10Y R7/7明黄色粘土がブロックで混じる)
 2 10Y R2/2黒褐色シルト(2mmの大粒が混じる。10Y R7/7明黄色粘土がブロックで少量混じる。炭化鉱を含む)
 3 10Y R2/1黑色シルト(2mm斑状に混じる。耕作土を含む)
 4 10Y R4/6灰・黄褐色シルト(耕作土と粘土がブロックで多量に混じる。炭化鉱を含む)

0 (1:40) 2m
51

ST4



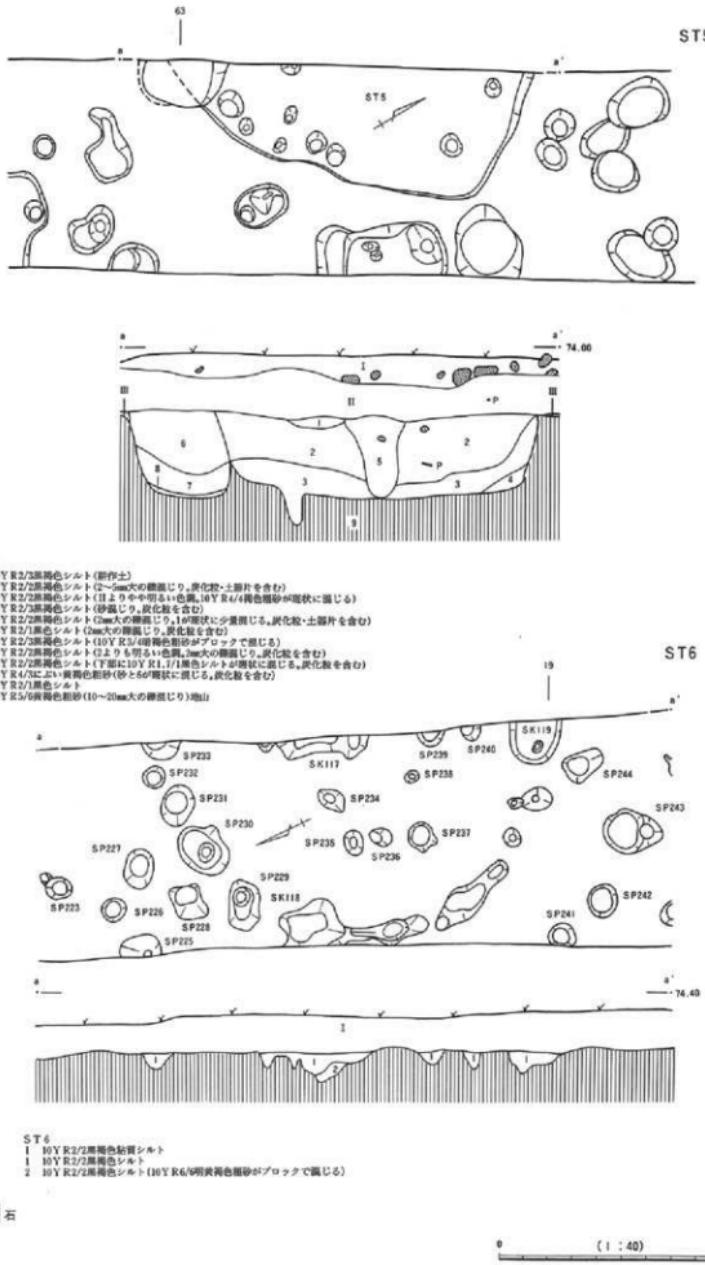
ST4

- I 10Y R2/2黒褐色シルト(2~5mmの細面じり。耕作土)
 II 10Y R2/2黒褐色シルト(2~5mmの細面じり。土壌層を含む)
 III 10Y R3/4褐色細砂シルト(2mmの大粒が混じる。粘土がブロックで少量混じる。炭化鉱を含む)
 1 10Y R2/2黒褐色シルト(2mmの大粒が少く混じる。粘土がブロックで混じる。土壌層・炭化鉱を含む)
 2 10Y R2/2黒褐色シルト(2mmの大粒がよく混じる。粘土がブロックで混じる。土壌層・炭化鉱を含む)
 3 10Y R2/2黒褐色シルト(よりも暗い色調。2mmの大粒が多く混じる。粘土がブロックで混じる。土壌層・炭化鉱を含む)
 4 10Y R2/2黒褐色シルト(よりもやや暗い色調。粘土がブロックが混じる。炭化鉱を含む。粘土部分のみ)
 5 10Y R3/6暗褐色シルト(2mmの大粒が混じる。粘土がブロックで少量混じる。炭化鉱を含む)
 6 10Y R2/2黒褐色シルト(10Y R3/2黒褐色細砂が層状に面じる。炭化鉱を含む)
 7 10Y R2/2黒褐色シルト(10Y R3/2黒褐色細砂と砂がブロックで混じる)
 8 10Y R4/6灰褐色細砂と砂がブロックで混じる
 9 10Y R4/6灰褐色細砂と砂がブロックで混じる
 10 10Y R4/6灰褐色粘土(塊状)
 11 10Y R4/6灰褐色粘土(塊状)
 12 10Y R5/6に上る黄褐色粘土(塊がブロックで少量混じる)
 13 10Y R2/2黒褐色シルト(よりやや明るく、よりも暗い色調。2mmの大粒が混じる。炭化鉱を含む)

0 (1:60) 2m

凡例
石

第11図 ST3・4住居跡



第12図 ST 5・6 住居跡

S X10 (13図) : A区北端、43-Aグリッドに所在する。南北1.18m、遺構確認面からの深さは1.42mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は5層からなり4層の暗褐色粘質シルトが主体的である。浅鉢や深鉢などの土器片の出土がみられた。

S X17(13図) : B区、49-Aグリッドに所在する。南北2.04m、確認面からの深さは1.49mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は起伏がある。覆土は12層からなり、レンズ状に互層になって堆積する。覆土からは多量の土器片が得られた。また、石籠(21-6)や磨製石斧(22-4)、石棒(23-7)などの出土もみられる。11層下部からは土偶の脚部(20-7)が出土した。

S K113(13図) : D区、22-Aグリッドに所在する。西側は調査区外となるがプランは円形と思われる。長軸99cm、短軸86cmを測り、遺構確認面からの深さは45cmである。断面が袋状をなし、底面はほぼ平坦である。深鉢(16-2)が石棒(23-6)や磨石(22-9)と共に伴している。S K114やS K115の覆土から出土した土器片が16-2に接合しているため、この土坑3基は同時期の所産と考えられる。

S K114 (13図) : D区、21-Aグリッドに所在する。S K113の約1.40m南に位置している。北部が電柱による搅乱を受け、東側は調査区外のため未検出である。規模は長軸96cm、短軸85cmで、確認面からの深さは50cmを測る。覆土は3層からなる。深鉢(16-1)が3層上面から出土し、底部から体部にかけての残存である。

S K115 (13図) : D区、21-Aグリッドに所在する。S K113の約2.20m南方、S K114の約0.9m西に位置している。長軸94cm、短軸88cmの円形をなす。確認面からの深さは56cmを測る。断面はやや袋状をなし、覆土はS K114と基本的に同一である。底面は凸凹している。遺物はあまり出土していない。

S K51 (13図) : C区、56-Aグリッドに所在する。西側は調査区外のため未検出であるが、プランは円形と思われる。規模は長軸86cm、短軸65cmを測り、確認面からの深さは44cmである。断面は底が広がる袋状を示す。底面は平坦である。

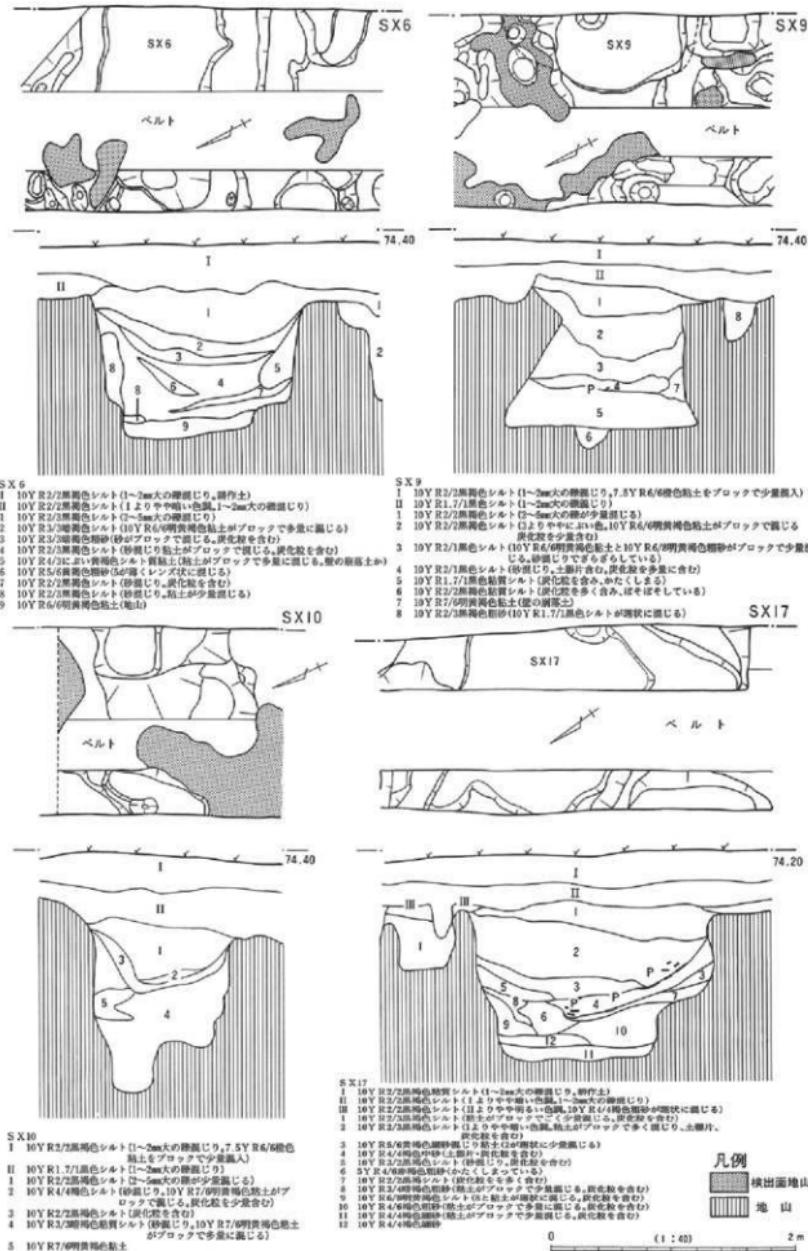
S K45 (13図) : C区、55-Aグリッドに所在する。長軸60cm、短軸56cmの橢円形をなす。確認面からの深さは46cmである。断面はS K51と同様、袋状をなす。覆土は黒褐色シルトの単層である。

S P30 (13図) : B区、46-Aグリッドに所在する。長軸26cm、短軸22cmの円形ピットである。底面はU字状を示す。覆土上面から小型鉢(R P 3-20-1)が出土した。

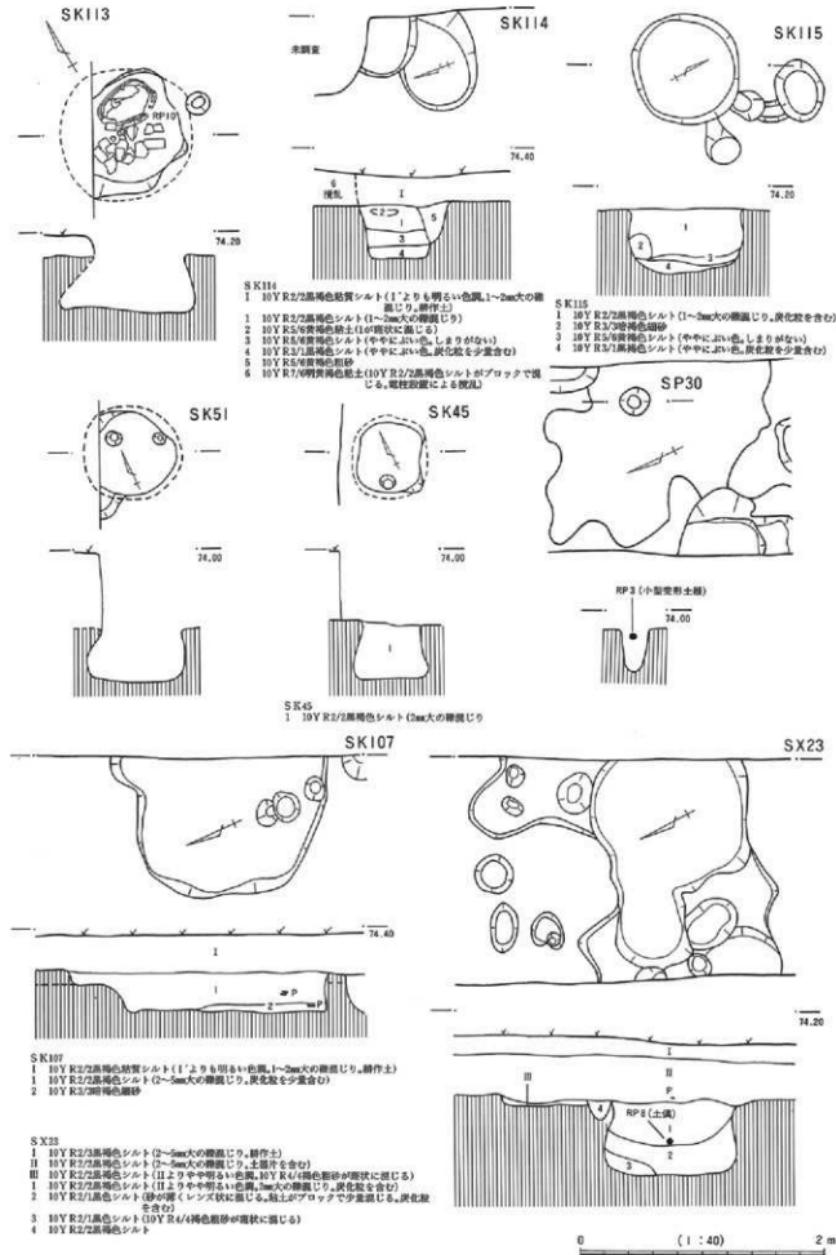
S K107 (13図) : D区、26-Aグリッドに所在する。東側は調査区外となり未検出である。規模は長軸1.76m、短軸1.18mである。確認面からの深さは24cmを測る。覆土は2層からなり、底面はやや凸凹している。

S X23 (13図) : C区、65-Aグリッドに所在する。東西とも調査区外となり未検出であるが、長軸2.24m、短軸1.80mの不整形をなす。確認面からの深さは59cmである。土器片が多く出土し、土偶(R P 8-20-3)は1層下部より出土した。

これらの遺構は縄文時代中期中葉、大木8a式期のものが主体的であるといえる。



第13図 S X 6 + 9 + 10 + 17土坑



第14図 土坑・ピット

遺構観察表

挿図	図版番号	遺構番号	調査区	検出地区	平面プラン	規模(cm)			備考
						長軸	短軸	深さ	
第10図	5	S T 1	B	51-A	(円形)	(466)	(121)	60	土坑に切られる
	5	S T 2	C	54-A	(円形)	372	(116)	40	S K 40に切られる
第11図	5	S T 3	C	60-A	(円形)	310	(150)	59	
	6	S T 4	C	62-A	(円形)	682	(164)	78	R P 5・9出土
第12図	5	S T 5	C	64-A	(円形)	306	(107)	64	土坑に切られる
	5	S T 6	D	20-A	(円形)	344	(170)	55~19	上部削平により柱穴のみ残る
第13図	7	S X 6	A	40-A	不整形	-	-	112	袋状
	7	S X 9	A	42-A	不整形	-	-	135	袋状
	-	S X 10	A	43-A	不整形	-	-	142	
	7	S X 17	B	49-A	不整形	-	-	149	P R 7出土
第14図	8	S K 113	D	22-A	(円形)	99	(86)	45	R P 10・R Q 6出土 袋状
	8	S K 114	D	21-A	(円形)	(96)	(85)	50	R P 11出土
	8	S K 115	D	21-A	円形	94	88	56	
	-	S K 51	C	56-A	(円形)	86	(65)	44	袋状
	8	S K 45	C	55-A	楕円形	60	56	46	袋状
	8	S P 30	B	46-A	円形	26	22	33	R P 3出土
	7	S K 107	D	26-A	(円形)	176	(118)	24	
	7	S X 23	C	65-A	不整形	224	(180)	59	R P 8出土 袋状
	7	S X 2	A	38-A	不整形	(112)	(61)	75	袋状 磁がはいる
	7	S X 24	D	28-A	不整形	-	-	77	袋状
	7	S K 96	D	29-A	(楕円形)	134	(55)	74	袋状 S K 95を切る
	7	S K 123	D	17-A		68	(57)	10	S P 295を切る

VI 出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は整理箱にして52箱を数え、その大半が土器である。石器類の出土は少ない。各遺物について以下に述べる。

1 土器 (15~19図、20~1・2、図版9~13)

土器は時期的特徴で第I~IV群土器に大別し、文様等により各類にさらに細別した。

第I群土器 (17~1~18、図版10)

底部から直立する大型の深鉢型の器形をなすものであり、口縁は波状をなす。口縁部には隆帯上に連続した刻みや、撫糸圧痕により曲線や幾何的な文様を施す。体部は纏文を地文とし、沈線や撫糸圧痕による文様を持つ。

1類 (17~1~3) 竹管による刺突、刻み目が施されるもの。1は波状口縁をなす。

2類 (17~4~8) 大型の波状口縁をもつものである。口縁部に撫糸圧痕文 (4~6~8) や交互刺突文 (5~7) を持ち、5~6~7は頂部が平になり両角に小突起がつく。

3類 (17~9~14) 円弧状の撫糸圧痕文をもつもの。

4類 (17~15~18) 沈線による鋸齒状の文様をもつもの。16は粘土紐貼付である。

第II群土器 (15~1、16~2、17~19~23、18図、19~1~3、図版10~11)

底部から直立したり、キャリバー型を呈したりする深鉢型の器形と、浅鉢型の器形がある。口縁部は粘土紐貼付などによる、装飾をもつものの、平縁に近くなる。体部には撫糸圧痕と粘土紐貼付により、渦巻などの曲線的な文様を主体として施す。

1類 (17~19~23、18~1~4) 隆帯上に刺突文・爪形文・刺突文を特徴とするもの。

2類 (18~5~10) 口縁部に隆帯あるいは粘土紐貼付による橢円形の棒状文が構成され、内部に押圧纏文が施文されるもの。また隆帯上に縦位の撫糸圧痕文が施文されるもの。

3類 (15~1、18~11~18) 縦位並列の撫糸圧痕文が施文されるもの。

4類 (15~2、16~2、18~19~25、19~1~3) 粘土紐貼付により主体的文様を抽出するものの、波状文、区画文などがある。

5類 (図版11) 口縁部に隆帯による渦巻やS字を意匠とした立体的装飾をもつもの。

第III群土器 (19~4~21、20~1、図版11~13)

器形はキャリバー型の深鉢を中心としている。纏文を地文とした上に、隆帯や沈線による渦巻や、曲線的文様を施すものであり、頸部には無文帶を持つ。

1類 (16~1、19~4~9) 粘土紐貼付と沈線を持ち主に渦巻文様を描くもの。

2類 (19~10~15、20~1) 沈線を主体文様とするもの。

3類 (19~16~21) 隆起線あるいは隆帯をもって文様を構成するもの。

第IV群土器 (19~22)

平安時代の土器。須恵器型の口縁部 (19~22) である。1点のみ包含層から出土した。

2 土偶 (20~3~8) 6点の出土である。完形品はない。3は頭部から上半身までの残存で以下の部分は欠損する。いわゆるカッパ型土偶である。W型の胸をもち、頭部にある

3個の穴は下に貫通する。8は脚部で、底面は1.5cm程えぐれている。

3 土製品 (20—9~16) 煙管状土製品 (9) が出土している。図示したものは1点であるが、その他に破片が確認されている。円盤状土製品は7点の出土である。土器片の周囲を打ち欠いて成形し、円形にしている。

4 石製品 (20—17・18) 円盤状石製品 (17) がS T 3から出土した。周囲を打ち欠いた後、両面を磨いたものと思われる。18は貫通口がある石製品である。

5 石器 (21~23図、図版12~14)

石鎌 (21—1) 有茎の石鎌が1点出土した。材質は頁岩である。茎部分にアスファルトの付着が認められる。

石槍 (21—2~5) 両面加工を施したもので4点の出土である。完形のものではなく、2はその先端部である。3~5は両端又は片側が欠損する。

石籠 (21—6~10) 篦状の形態をした石器で5点が出土した。8cm前後のものが3点(7~9)ある。頁岩製である。

打製石斧 (21—11) C区、包含層からの出土である。両面が加工される

不定形石器 (21—12~17) 上記の種類に属さないものを不定形石器とした。15点の出土で、図示したのはその内6点である。そのほとんどが頁岩製である。

磨製石斧 (22—1~7) 7点の出土である。5のみ完形品で他は刃部を欠損したものが多。1は蛇紋岩製の小型磨製石斧である。その他の材質は粘板岩である。

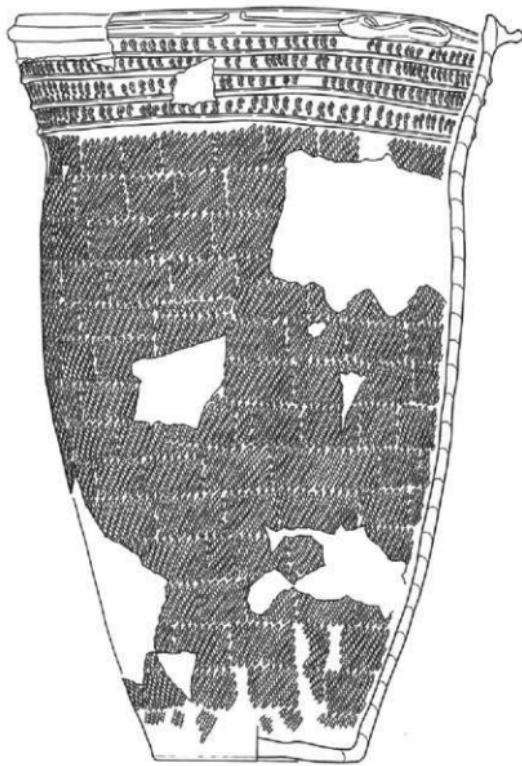
磨石 (22—8~16) 29点の出土である。その内、遺構内から出土したもののみ図示した。礫面全体を磨面として使用したもの(8~12)と、数カ所の平坦面を磨面として使用したもの(13~16)とに分けられる。

面取り石 (22—17) H区の包含層から出土した。断面多角形の礫の側面に明瞭な磨面を形成し、磨石とは形状が異なるため面取り石とした。

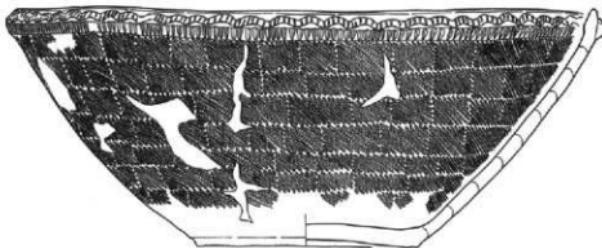
凹石 (23—1~4) 全部で24点出土している。図示したのは4点である。楕円形で、大きさは10cm前後のものが多い。1面にのみ凹痕を有するもの(1・4)と、表裏2面に凹痕を有するもの(3)がある。また側面にも凹痕を有するもの(2)が1点確認された。また1~3は磨面をもつ。

石皿 (23—5) E区、13-Bグリッドの遺構確認面から出土した。1/2弱の残存であるが、形状は楕円形をなすと思われる。加工によって縁を作り出したものと思われ、その内側が研磨されている。裏面にはやや不明瞭な盛り上がりを示す脚がつく。また裏面に砥石として利用された凹んだ溝跡をもっている。

石棒 (23—6~8) 3点の出土である。6はSK113の底面より出土した。長さは25.6cmを測り、完形である。表面ほぼ中央に約2cm幅の凹みをもつ。表面は平坦であるが、裏面は緩やかなカーブをなし、下端に段を形成する。7はSX17からの出土である。両端や裏面が欠けているが、断面が六角形をなすと思われる。8はST4から出土した。珪化木であり、一応石棒と分類した。縦に4~8mm幅で線状のくぼみが認められる。



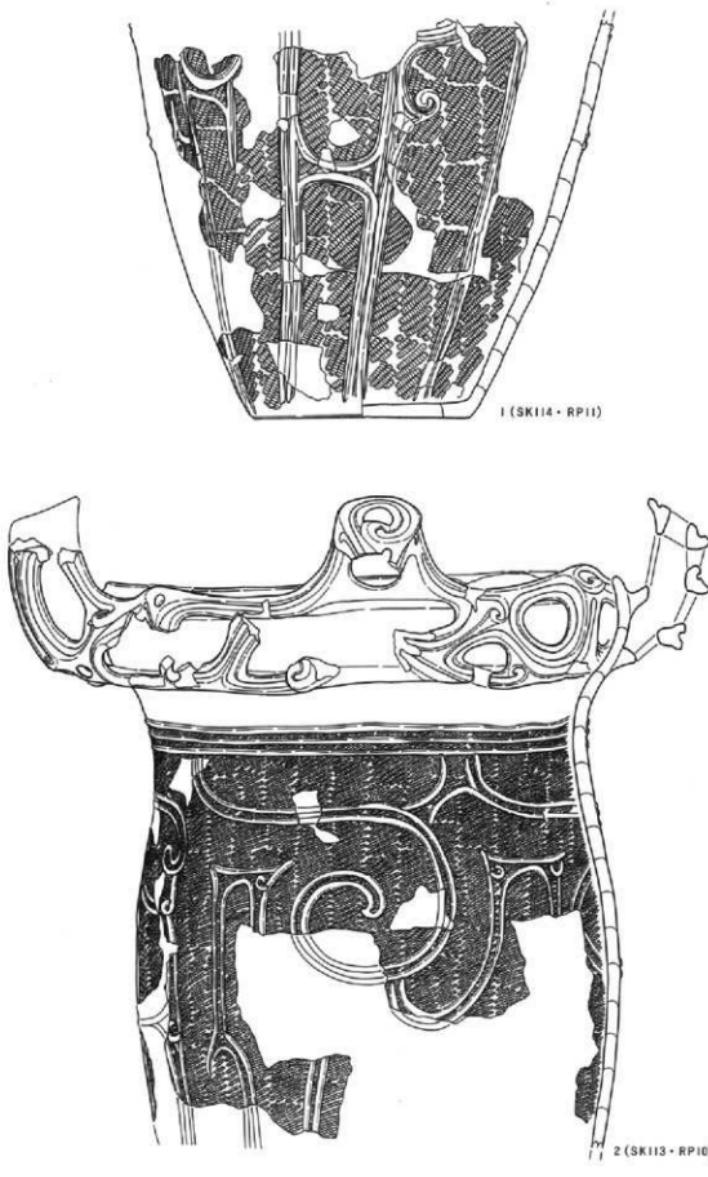
I (ST4・RPS)



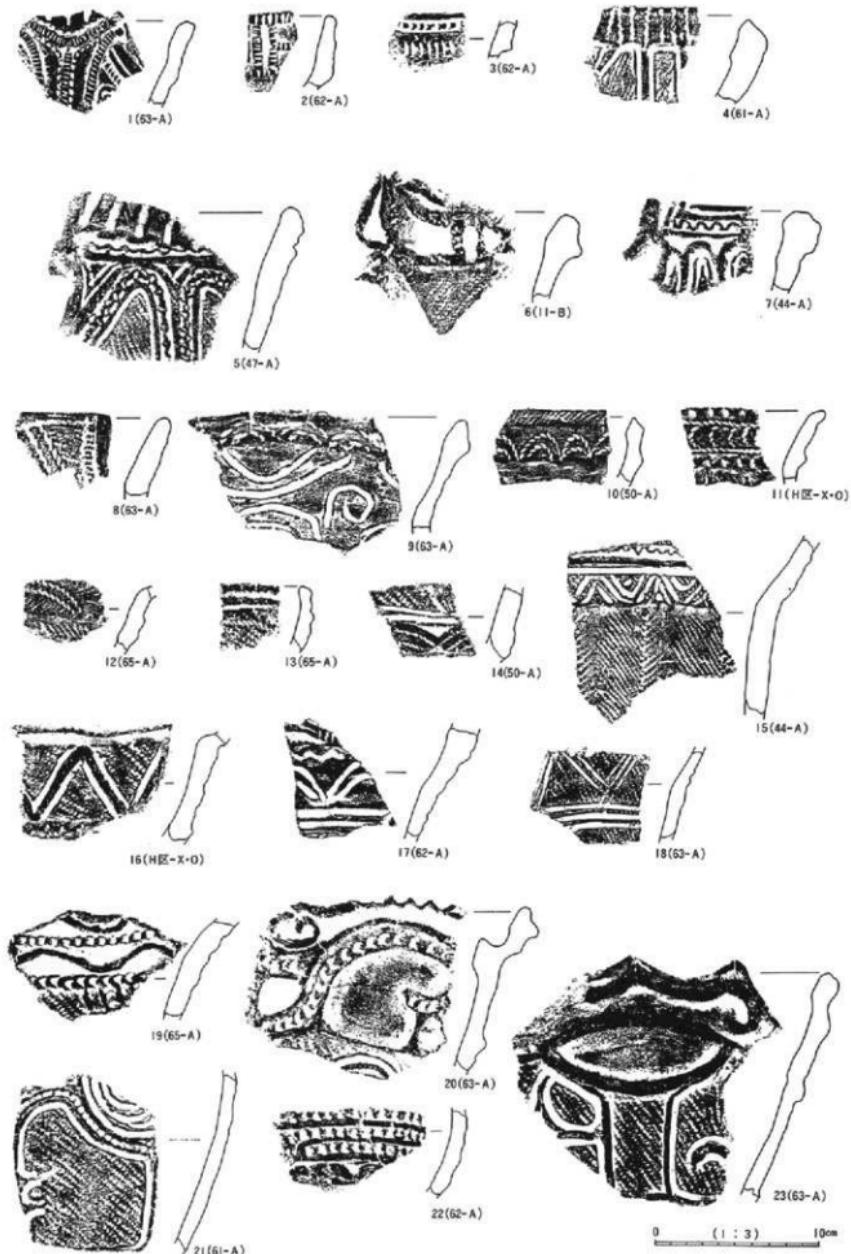
Z (ST4・RPS)

0 (1 : 4) 20cm

第15図 出土土器(1)



第16図 出土土器(2)

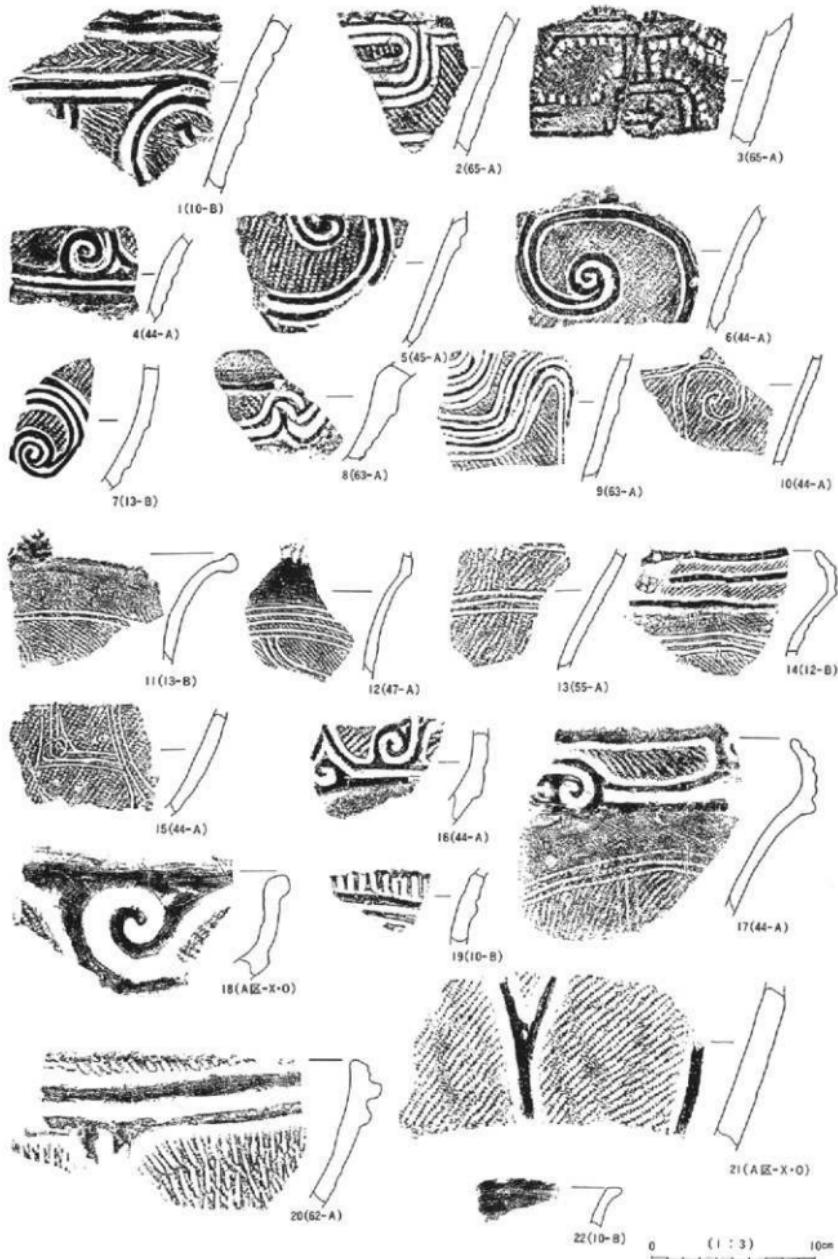


第17図 出土土器(3)

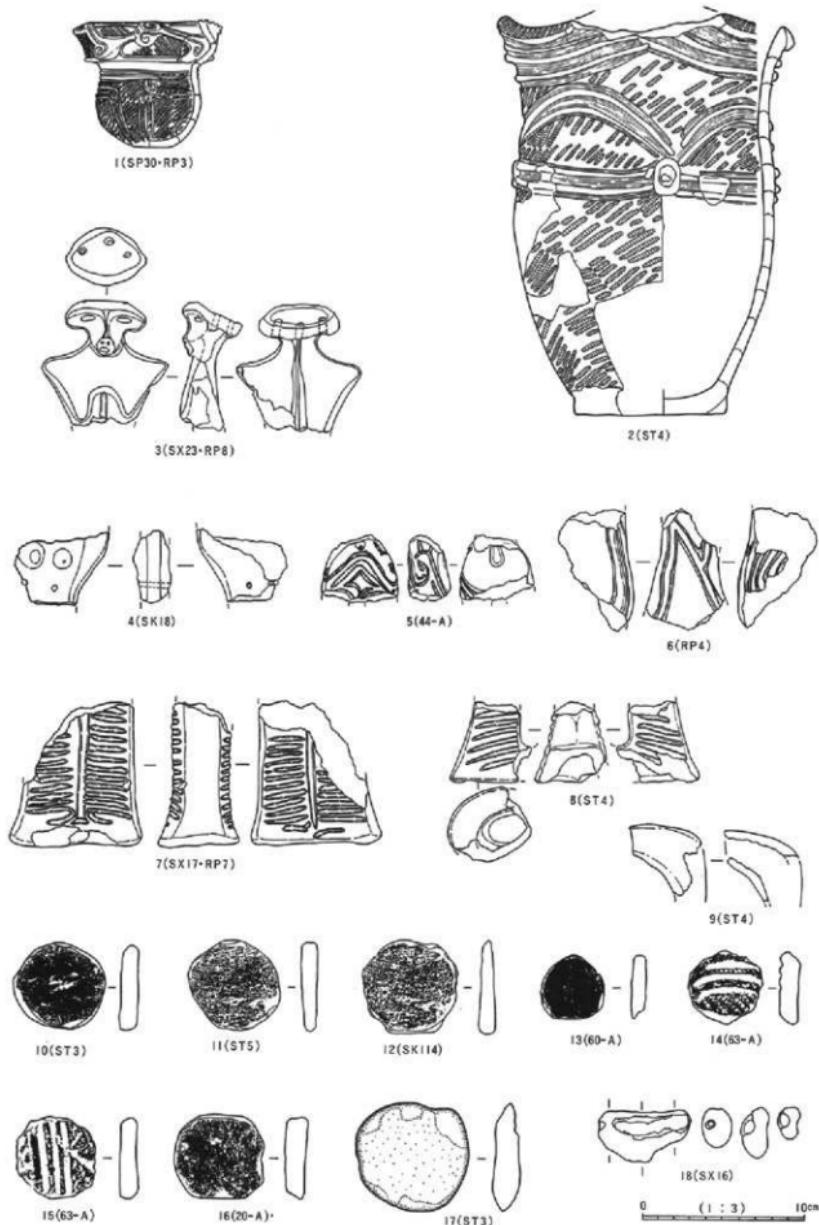
落合遺跡



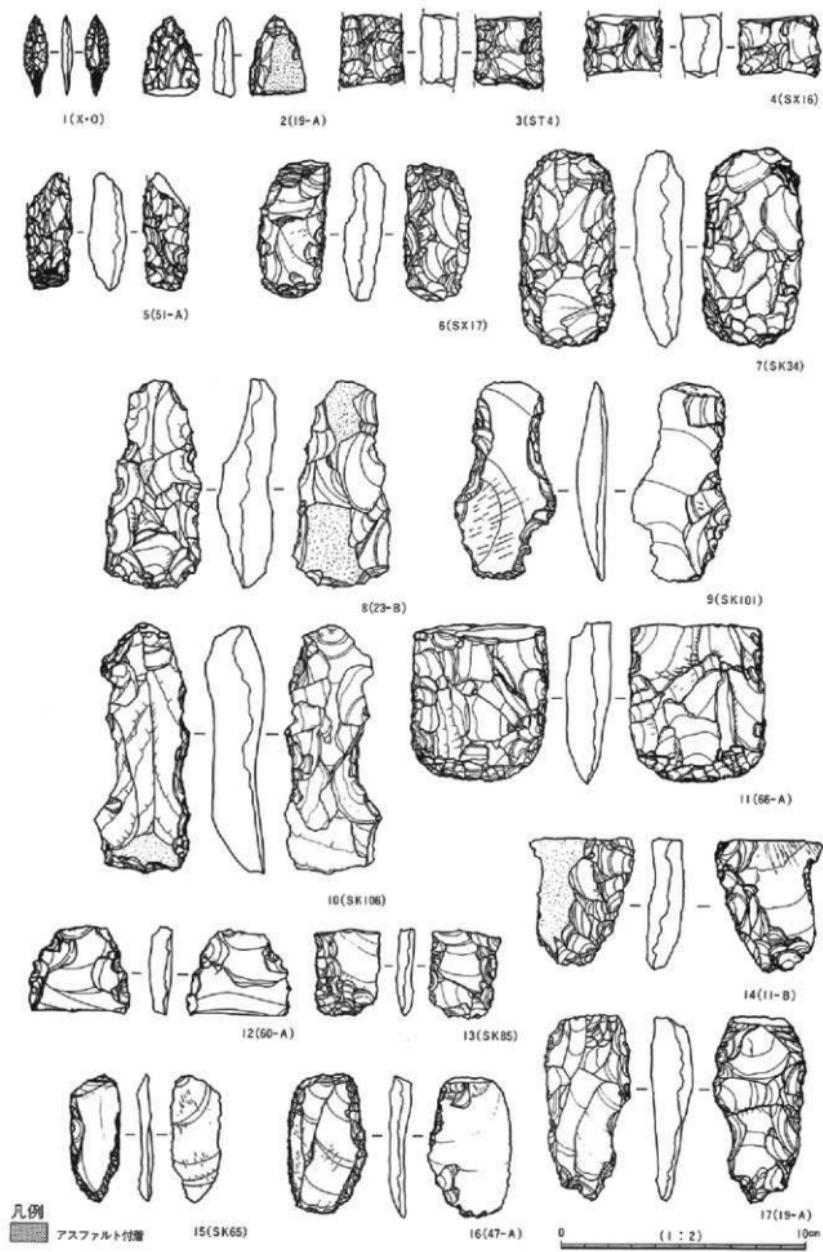
第18図 出土土器(4)



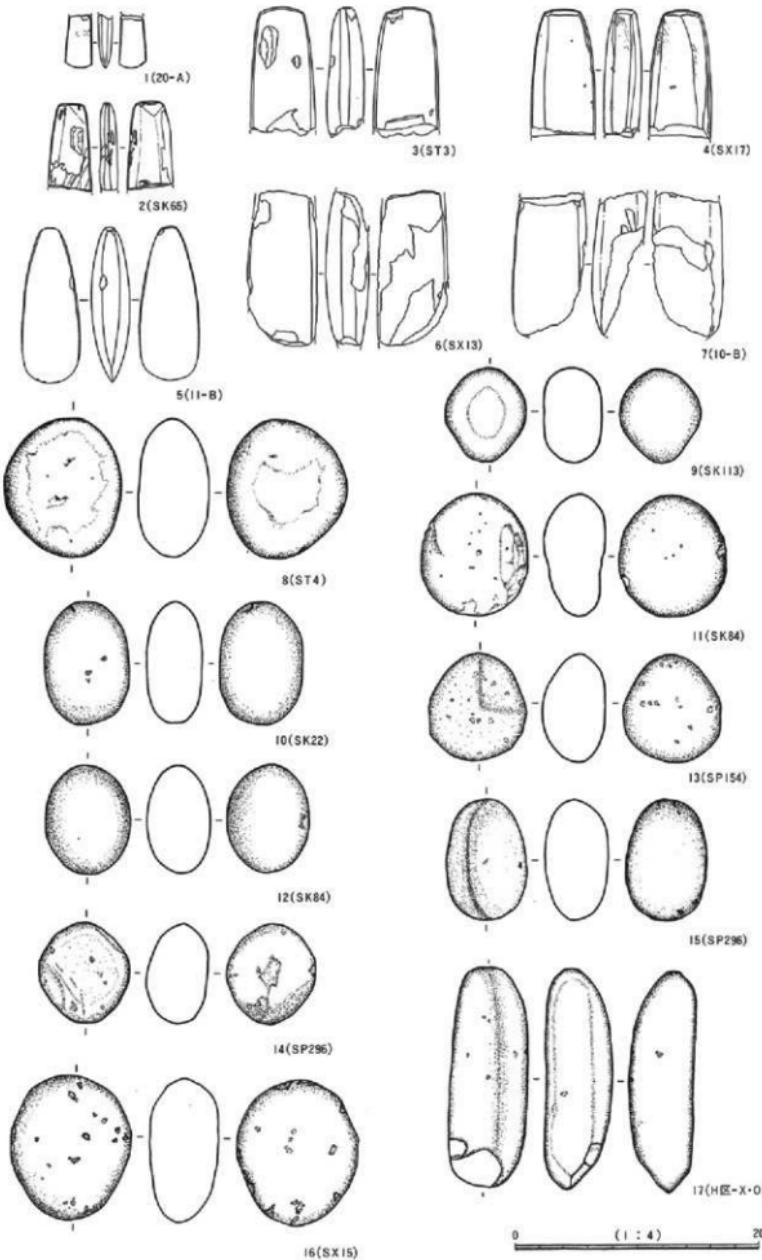
第19図 出土土器(5)



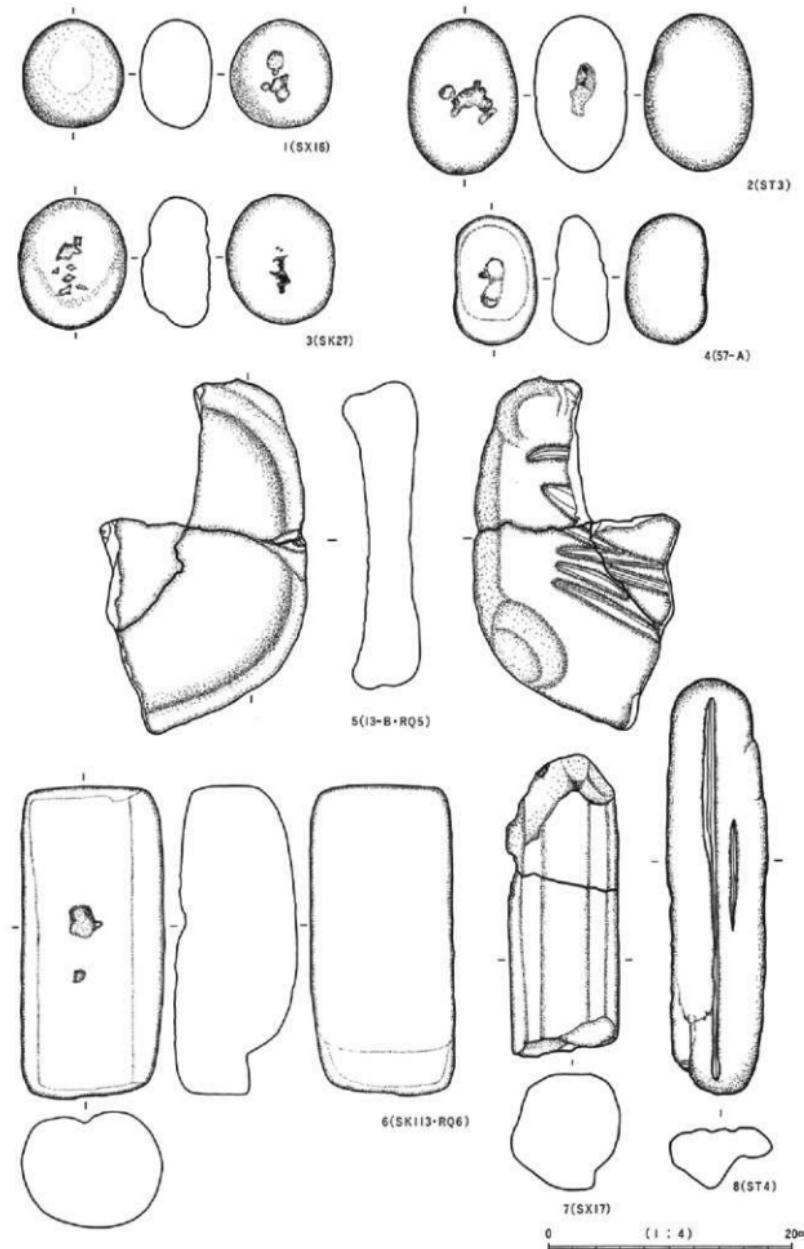
第20図 出土土器・土偶・土製品・石製品



第21図 出土石器(1)



第22図 出土石器(2)



第23図 出土石器(3)

遺物観察表

探査団	No.	固形 番号	出土遺構	調査区	検出地区	器種	大きさ (mm)			備考	
							口径	底径	高さ		
第15回	1	9	S T 4	C	62-A	深鉢	344	165	610	R P 9	
	2	9	S T 4	C	62-A	浅鉢	488	180	192	R P 5	
第16回	1	9	S K114	D	21-A	深鉢	—	174	(318)	R P 11	S K114・115 出土類と複合
	2	9	S K113	D	22-A	深鉢	460	—	(534)	R P 10	
第20回	1	13	S P30	B	46-A	小型鉢	89.5	22	78	R P 3	
	2	13	S T4+63-A	C	62-A	深鉢	179	94	221		
第20回	3	13	S X23	C	65-A	土偶	(76)	74	33	—	R P 8
	4	13	S K18	B	46-A	土偶	(39)	(51)	22	—	胸部
	5	13	—	B	44-A	土偶	(40)	46	25	—	脛部
	6	13	—	C	62-A	土偶	(73)	(41)	47	—	脛部
	7	13	S K17	B	49-A	土偶	(87)	80	51	—	脚部
	8	13	S T 4	C	62-A	土偶	(49)	43	(36)	—	脚部
	9	13	S T 4	C	62-A	縦管状土製品	—	—	6	—	
	10	12	S T 3	C	69-A	円盤状土製品	52	55	11	—	
	11	12	S T 5	C	64-A	円盤状土製品	54	56	9	—	
	12	12	S K114	D	21-A	円盤状土製品	57	58	11	35.8	
	13	12	—	C	60-A	円盤状土製品	38	38	8	26.6	
	14	12	—	C	63-A	円盤状土製品	44	44	12	38.6	
	15	12	—	C	63-A	円盤状土製品	50	47	13	13.3	
	16	12	—	D	20-A	円盤状土製品	50	55	13	23.3	
	17	12	S T 3	C	69-A	円盤状土製品	65	68	17	29.6	
	18	13	S X16	B	48-A	石製品	56	30	18	42.7	石笛カ アスファルト付着
第21回	1	13	—	X-O	石鏡	33.5	9	3.5	63.3		
	2	13	—	D	19-A	石槍	33	23	8	—	
	3	13	S T 4	C	62-A	石槍	29	27	14	1.0	
	4	13	S X16	B	48-A	石槍	24	32	16	6.6	
	5	13	—	B	51-A	石槍	46	18	15	16.5	
	6	13	S X17	B	49-A	石鏡	56	2	15	15	
	7	13	S K34	B	48-A	石鏡	81	39	20	81.0	
	8	13	—	E	23-B	石鏡	86	39	21	67.0	
	9	13	S K101	D	29-A	石鏡	81.5	40	12	35.4	
	10	13	S K106	D	26-A	石鏡	102	40	23	83.6	
	11	13	—	C	66-A	打製石斧	64	53	20	84.2	
	12	13	—	C	60-A	不定形石器	34	41	9	15.8	
	13	13	S K85	C	66-A	不定形石器	35	26	6	8.6	
	14	13	—	E	11-B	不定形石器	52	42	12	32.6	
	15	13	S K65	C	61-A	不定形石器	51	20	5	7.0	
	16	13	—	B	47-A	不定形石器	57	33	8	18.9	
	17	13	—	D	19-A	不定形石器	76	35	16	44.6	
第22回	1	13	—	D	20-A	小型磨製石斧	(43)	22	10.5	18.1	R Q 4
	2	13	S K65	C	61-A	磨製石斧	(69)	36	13	59.9	
	3	13	S T 3	C	60-A	磨製石斧	(104)	53	29	261.7	
	4	13	S X17	B	49-A	磨製石斧	(104)	50	28	292.7	
	5	13	—	E	11-B	磨製石斧	128	48	30	263.7	
	6	13	S X13	B	44-A	磨製石斧	(127)	57	34	442.8	
	7	13	—	E	10-B	磨製石斧	(114)	57	39	265.1	
	8	14	S T 4	C	61-A	磨石	113	95	56	780	
	9	14	S K113	D	22-A	磨石	75	65	47	295	
	10	14	S K22	B	46-A	磨石	100	69	44	450	
	11	14	S K84	C	65-A	磨石	99	89	48	520	
	12	14	S K84	C	65-A	磨石	87	68	49	415	
	13	14	S P154	D	26-A	磨石	86	79	50	440	
	14	14	S P296	D	17-A	磨石	80	72	49	300	
	15	14	S P296	D	17-A	磨石	98	65	51	415	
	16	14	S X15	B	47-A	磨石	118	98	57	885	
	17	14	—	H	X-O	面取り石	180	64	50	790	
第23回	1	14	S X16	B	48-A	凹石	88	82	57	600	磨面有り
	2	14	S T 3	C	60-A	凹石	126	86	74	970	磨面有り
	3	14	S K27	B	47-A	凹石	105	87	50	675	磨面有り
	4	14	—	C	57-A	凹石	105	67	45	455	
	5	14	—	E	13-B	石皿	(276)	(162)	62	2200	
	6	14	S K113	D	22-A	石棒	256	117	96	2500	R Q 6
	7	14	S X17	B	49-A	石棒	242	90	96	2500	
	8	14	S T 4	C	61-A	石棒	341	82	46	2200	R Q 3

本表は落合遺跡で出土した遺物のうち辨認として扱ったものを掲載した。

遺物観察表中の() 内数値は既存復元による推定値または既存復元を示している。

出土遺構が記入してあるものは全て連続覆土内からの出土である。

VII まとめ

今回の調査はふるさと農道緊急整備事業（拝見地区）の工事に先立つ記録保存のための発掘調査である。遺跡範囲約 150,500m²のうち 382m²を調査した。調査によって得られた成果は次のようにまとめられる。

遺構について

調査区からは遺構が密集して検出された。確認された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 6 栋、土坑 142 基、柱穴・ビットが約 310 基である。土坑の中には大型の貯蔵穴と思われるものも確認された。特徴としては、住居が分布する区域、貯蔵穴と思われる土坑が分布する区域、ビットが分布する区域、遺構が希薄な区域というようにある程度分けられるということである。落合遺跡と同じ村山市にある西海満遺跡は縄文時代中期の集落であるが、遺構が希薄な広場域を中心として、墓域、住居域、貯蔵域が環状にめぐるという集落構造が調査によって明らかになった。岩手県西田遺跡でも同様な集落構造が明らかになっている。落合遺跡の場合も環状に分布するかどうかは不明だが、一定の区域を選定して住居や貯蔵穴を作り、居住していたということは言えるであろう。

遺物について

本遺跡出土の土器は平安時代の須恵器 1 点を除けば、第 VI 章で述べたように縄文時代中期初頭～中葉にかけてのものである。本項では先に分類した第 I ～ III 群土器について時期的な位置づけを行う。

第 I 群土器

竹管による刺突、刻み目を特徴とするもの（1 類）、波状口縁をもつもの（2 類）、円弧状の撚糸圧痕文をもつもの（3 類）、鋸歯状の文様をもつもの（4 類）である。1 類のような竹管による施文は北陸との関連が考えられる。大木 7 b 式に比定される。

第 II 群土器

縦位の撚糸圧痕文や刺突文、粘土紐貼付により文様を構成するもの（1 ～ 4 類）、また口縁部に S 字状や渦巻の立体的装飾をもつもの（5 類）である。5 類のような口縁、1 ～ 4 類の文様構成をなす体部をもつ深鉢になると思われる。大木 8 a 式に比定される。

第 III 群土器

粘土紐貼付や沈線、隆帯によって主に渦巻文を抽出するもの（1 ～ 3 類）。粘土紐や隆帯は丁寧に調整されている。大木 8 b 式に比定される。

その他、土製品・石製品、土偶、石器類は前述の縄文土器の時期と基本的に同じで、縄文時代中期初頭～中葉に属するものであろう。

報告書抄録

ふりがな	おちあいいせきほくつちょうきほうこくしょ									
書名	落合遺跡発掘調査報告書									
副書名										
巻次										
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書									
シリーズ番号	第36集									
編著者名	山口博之 渡辺薫									
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター									
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301									
発行年月日	西暦 1996年 3月 31日									
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因		
おちあいいせき 落合遺跡	山形県 村山市 大字土生田 字落合 2595他	市町村	遺跡番号	6208	642	38度 35分 33秒	140度 22分 37秒	19951002 ~19951122	382	ふるさと 農道緊急 整備事業 (押見地区)
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
落合遺跡	集落跡	縄文時代 中期 平安時代	住居跡 6 土坑142 ピット313	縄文土器 石器 土偶 土製品 石製品 須恵器	最上川右岸河岸段丘上 に位置する。舌状に発達した台地の中央を南北に沿って調査がなされた。調査区からは、ピットが集中している箇所、土坑、住居跡が集中している箇所などが検出され、集落構成の一端をうかがい知ることができる。					

図 版



航空写真（遺跡上空北東より撮影）

図版 2



航空写真（遺跡上空南より撮影）



A区調査前（南から）



D区調査前（南から）



A区遺構発掘（南から）



D区遺構検出状況（南から）



A区東壁土層断面（南西から）



D区東壁土層断面（北から）



A区埋め戻し（南から）



D区埋め戻し

図版 4



A B 区遺構検出（南から）



A 区遺構完掘（南から）



E 区遺構完掘（北から）



E 区東壁土層断面（西から）



E 区遺構完掘（南から）



F 区調査状況（南から）



G 区遺構完掘（北東から）



H 区遺構完掘（南から）



S T 1 土層断面（北から）



S T 1 土層断面（北から）



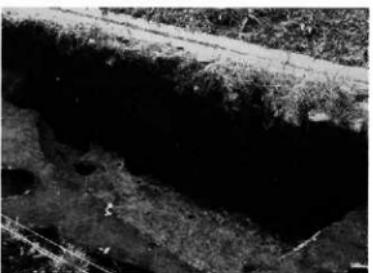
S T 2 検出（東から）



S T 2 完掘（東から）



S T 5 検出（南から）



S T 5 完掘（北東から）



S T 3 （南から）



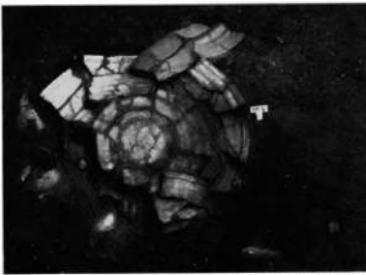
S T 6 （西から）



S T 4 住居跡調査状況（南から）



S T 4 検出（南から）



R P 5 （南から）



S T 4 （北から）



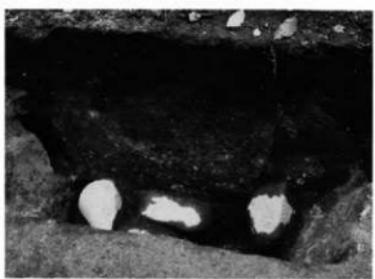
S T 4 （南西から）



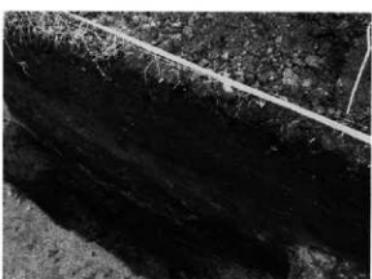
S X 6 (西から)



S X 9 (西から)



S X 2 (西から)



S X 17 (南西から)



S X 23 (北西から)



S K 107 土層断面 (南西から)



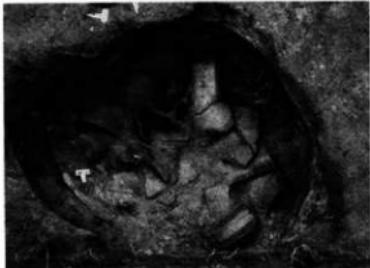
S X 24 土層断面 (西から)



S K 96 土層断面 (西から)



RP 10(S K 113) (西から)



RP 10(S K 113) (西から)



RP 11(S K 114) (西から)



SK 114完掘 (西から)



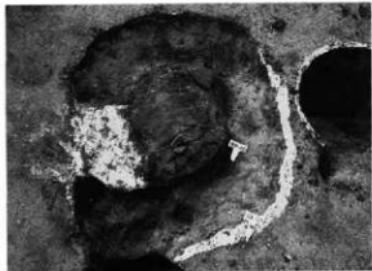
SK 115土層断面 (東から)



SK 45 (南から)



RP 3(S P 30) (西から)



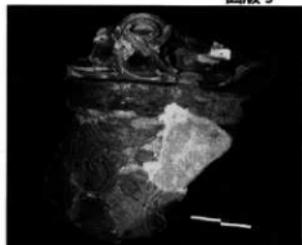
RP 12(S K 123) (北から)



15—1



16—2



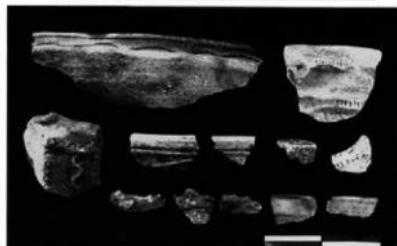
SK 113出土土器



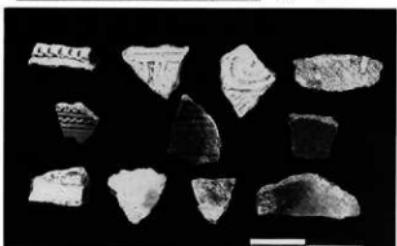
15—2



16—1



ST 1住居跡出土土器



ST 2住居跡出土土器



ST 3住居跡出土土器



ST 4住居跡出土土器



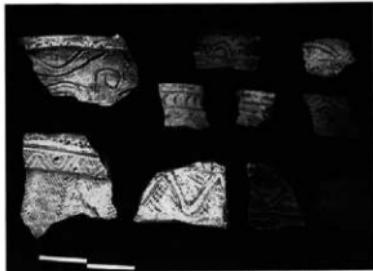
ST 4住居跡出土土器



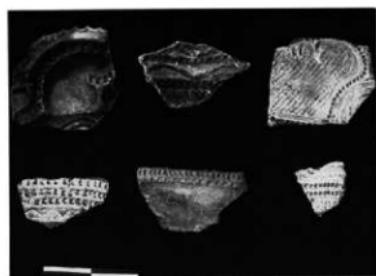
ST 5住居跡出土土器



第Ⅰ群土器（1・2類）



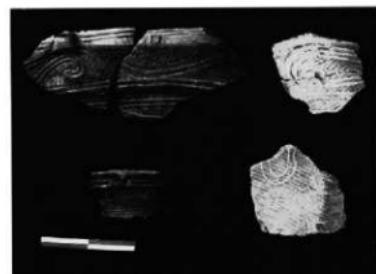
第Ⅰ群土器（3・4類）



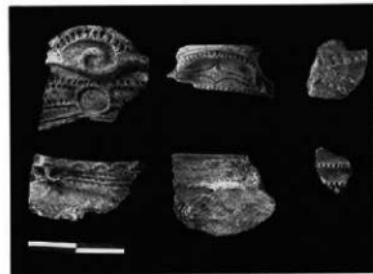
第Ⅱ群土器（1類）



第Ⅱ群土器（1類）



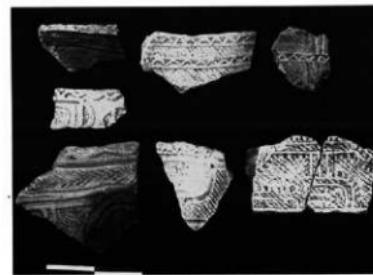
第Ⅱ群土器（4類）



第Ⅱ群土器（2類）



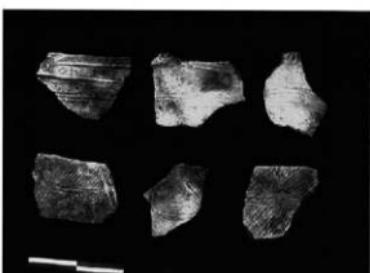
第Ⅱ群土器（3類）



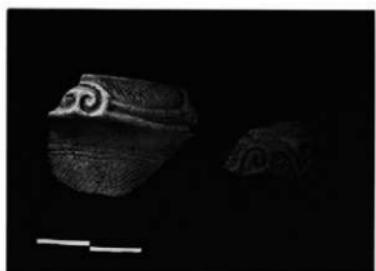
第Ⅱ群土器（4類）



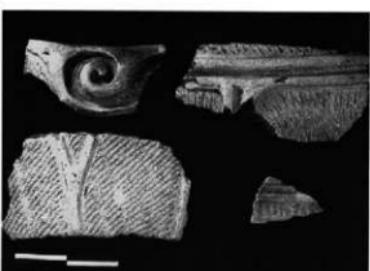
第III群土器（1類）



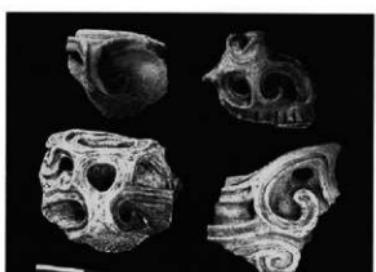
第III群土器（2類）



第III群土器（3類）



第III群土器（3類）



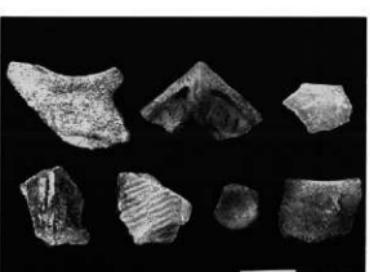
第II群土器（5類）



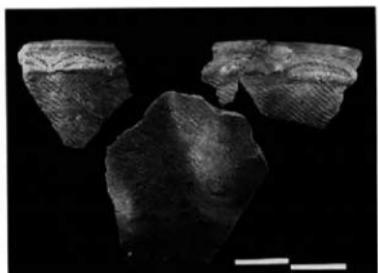
第II群土器（5類）



SK 107出土土器



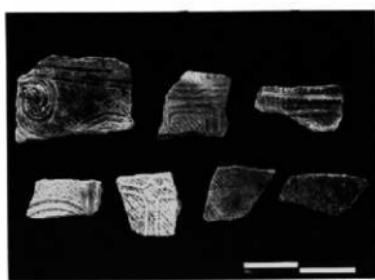
SX 9出土土器



S X 10出土土器



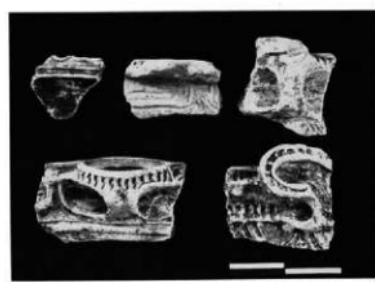
S X 10出土土器



S X 17出土土器



S X 17出土土器



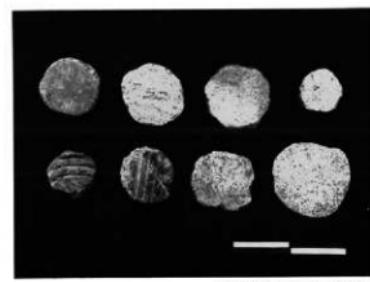
S X 23出土土器



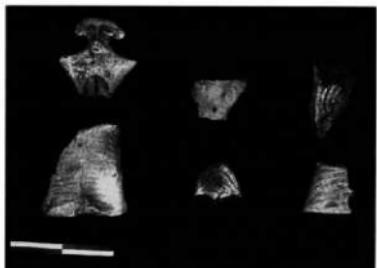
S X 23出土土器



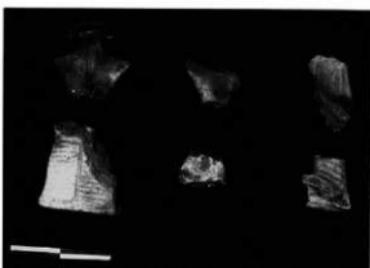
S X 23出土土器



円盤状土製品・石製品



土偶



同左裏面



20-2



20-1



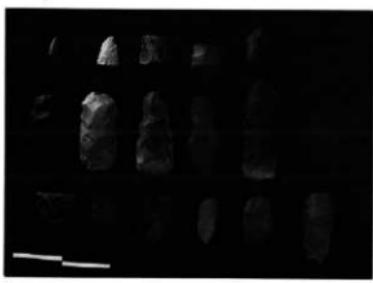
煙管状土製品



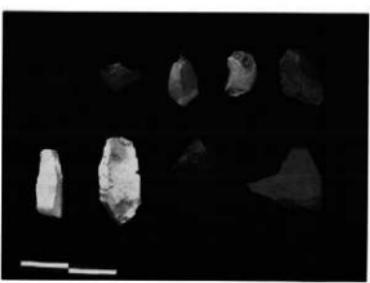
磨製石斧



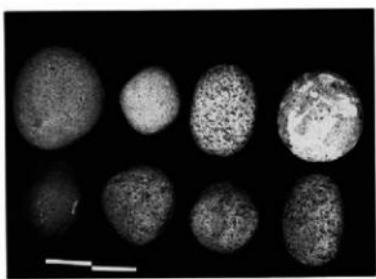
同左裏面



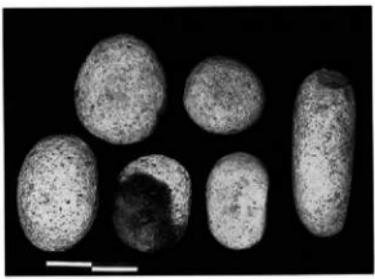
出土石器



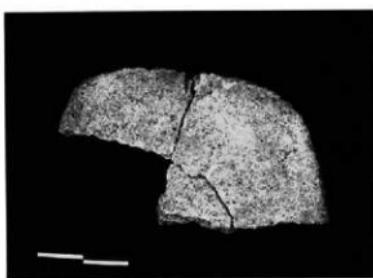
出土石器



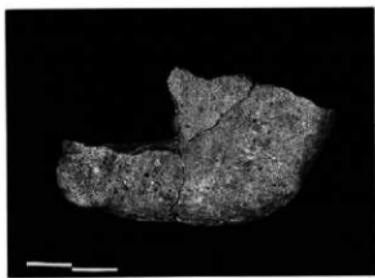
磨石



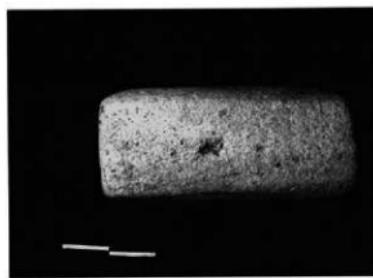
磨石・凹石



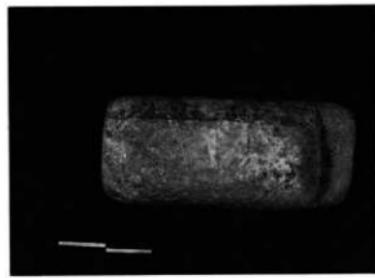
石皿 (23-5)



石皿 (23-5)



石棒 (23-6)



同左裏面 (23-6)



石棒 (23-7)



石棒 (23-8)

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第36集

落合遺跡発掘調査報告書

1996年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 大場印刷株式会社
